八波則吉編

現代文學新選

一卷

東京開成館藏版

42610

教科書文庫

4

810

51-1929

20000
40092

資

教科書文庫
4
810
51-1929
2000040092

375.9
Ya20

文部省檢定濟
昭和四年二月十三日　師範學校・中學校・高等女學校國語科用

現代文學新選

八波則吉編

株式會社東京開成館藏版

平福百穗裝幀

広島大学図書
2000040092

廣島大學圖書之印

廣島大学
教
40092
図書

目次

一　桃……吉田絃二郎……一
二　武藏と卜傳（脚本）……長與善郎……四
三　童謠三篇（詩）……三一
四　天の橋立……村松梢風……三五
五　黑衣聖母……芥川龍之介……四五
六　祖母……長谷川辰之助……六一
七　器械體操……櫻井忠溫……六九
八　祭のこと……泉鏡花……七六
九　郊外（詩）……竹友藻風……八四
一〇　身邊涼味……相馬御風……八五
一一　旅人と犬……前田夕暮……九五
一二　熱海から東京へ……島崎藤村……一〇六
一三　風（詩）……加藤介春……一一二
一四　松花江のほとり……田山花袋……一一三
一五　初鷹狩……矢田挿雲……一二二
一六　春の歌…………一五五
一七　崑崙山……太田正雄……一五七

トーレブ
武藏と童子……（一四―一五）
祭の日……（七八―七九）
郊外……（八四―八五）
隅田川口……（二八―二九）
藤吉郎の手柄……（一四六―一四七）

廣島大學圖書之印

現代文學新選　卷一

吉田絃二郎
名は源次郎、佐賀縣の人、文學者、明治十九年生

辛うじて（やうやく、やつと）

一　桃

麥は五六寸に伸びてゐる。雲雀がたゞ一つの黑點に見えるほど高く舞ひのぼつて、春を啼いてゐる。草は芽生えはじめてゐる。露はまだ冷たい。霞は昨日今日辛うじて立ち初めてゐる。

春が來た！　さう思ふだけでも、私達はあの暗い冬を無事にすごして來たことの有りがたさを、しみ〴〵と感じないではゐられない。子供達は遠い雪どけの山を眺めながら、黑い土

の上に躍りあがつて歌ふ。人といふ人が碧玉のやうに輝き出した空を見、また湖の面のやうに和やかに土を包む青い草を踏んでは、その魂を更生の喜びにわなゝかせる。

その魂を云々　自分の心をば生れかはつたといふ喜びにそは〳〵させる

子供等の春の喜び、大人達の春の喜びを一つにして、青い麥畑のほとりにあらはれ出たのが桃の花であらう。大地の喜び、野の喜び、空の喜びはたゞこの花に燃えてゐる。

吉田絃二郎

それは大分昔の話であるが、私の父が麥畑の中に小さな家を建てたことがあつた。私達はその小家に六年も七年も住んでゐた。雨が降ればよく雨が漏り、夜は壁の隙間から星が見えた。それを建てる時、私達は麥畑の傍に拇指ぐらゐの桃の樹を一本植ゑた。はじめてその樹が

花を持つた春を、私は忘れることが出來ない。私達は麥畑の中に躍りあがつて喜んだ。それからは年々花をつけ實を結んだ。麥を刈る頃になれば、私達は桃の實を取つては食べた。その後、母が死に父が死に、兄弟達は散り〳〵になつて、その小屋みたいな故郷の家はこはされてしまつた。しかし、桃の樹だけは今では家よりも高くなつて、春毎に花を咲かせてゐる。まことに「年々歳々花相似」の歎きだけが殘つてゐる。

故郷　佐賀縣神崎郡西郷村

年々歳々云々　支那の劉廷芝の詩の句、これにつゞいて「歳々年々人不同。」とある

故郷の桃で思ひ出したが、私達の郷里の習慣として、三月の雛祭にはきつと桃の花を盃に浮べて、酒と一緒に飲んだものである。その頃になれば、たゞ一人の男の子であつた私は母にいひつかつて、麥畑の隅にあつた桃の樹にのぼつて、桃の花を手折つて來るのであつた。武藏野を歩いて、たま〳〵麥畑の

ほとりの桃の樹を見ると、今でも私は故郷の貧しい小屋と、そこに住んでゐた父母とを思ふのである。（旅人）

桃の花の與へる明るい喜ばしい感じが出てゐるばかりでなく、なほまた作者の少年の日を思はせる桃の樹のことがしみ〴〵と描かれてゐる。文章は順序正しく、まとまりがよく、言葉づかひも手落なく整へられてゐる。

長與善郎
東京の人、文學者、明治二十一年生

二　武藏と卜傳

第一場

或深山の谷にかけた細い釣橋の傍。釣橋といつても名ばかりのもの。

正面の高い處、雪を戴いた峰の上に晝の月が見える。梅が

武藏
宮本氏、室町時代末期から江戸時代初期にかけての劍客

咲いてゐる。

深い谷川の音。

はじめ何處ともなく鋭い笛の音が聞え、それが止むと、武藏一人武者修行の姿で右手の坂路にさしかゝる。

武藏　（息を切らせながら、立止まり耳を澄す）はてな。何處へいつたんだ。馬鹿にちよこ〳〵速い野郎だ。（手をかざして四邊を見廻し、橋に眼をとめる）何だ。これで橋か。――小僧奴。こいつを渡つて……。（と、足をかけて踏んで見る）あぶない。これやあいかん。（やめて頸をひねる）

また笛の音が聞える。

武藏　ふむ。小僧。生意氣に味をやりをるな。そんなことをして、おれをからかふつもりなのか。

童子（ひよいと武藏の後に木から飛びおりて來る）やつと來たね。をぢさん、あんまりゆつくりしてゐるから、おれあ迷子になつたかと思つて心配してたよ。

武藏　ふむ。なか〳〵口も達者だな。こんな山の中の小猿にしちやあ大出來だ。誰か先生がゐるな。

童子（石に腰を掛ける）あゝ、ゐるとも。天狗さんがゐるよ。天狗さんがおいらの先生だ。

武藏　さうだらう。天狗は多いからな。烏天狗かな。

童子　をぢさんは雀天狗かな。

武藏　はつは。所が、この雀天狗、日本中を飛び廻つてゐるんだが、實はまだ自分より強い烏にもとんびにも逢つたことがないんで、困つてゐるんだよ。（腰の煙草を取つて吸ひだす）

童子　へえ。して見ると、日本といふ處はよつぽどくだらない烏の多い國と見えるね。山の中にゐると、なんにも分らないが。

武藏　ほんたうだよ。ちつと烏らしい烏といつたら、まあお前の處の天狗ぐらゐのものかね。

長與善郎

童子　はつは。をぢさんの先生ぐらゐなら、わざ〳〵うちの天狗が出るまでのこともない。おいらで澤山らしいね。

武藏（笑ひながらも少しあきれて）恐入つたね、どうも。井戸の中の蛙といふが、近頃は山の中にも蛙がゐるかな。

童子（膝の上に片肱をついて）まつたくだ。町の中の蛙、山を知らず

だ。ーだが、かうしてこゝから見てゐると、なるほど、をぢさん、ちつとはやれさうだね。そんなに馬鹿な恰好はしてゐないや。

武藏　何だと。

童子　何、をぢさんはそんなに空つぽぢやあないつていふことさ。大抵の者はもつとずつと空つぽな、影ん法師見たいなもんだよ。をぢさんは影ん法師ぢやあないよ。

武藏　いやはや、光榮の至りだな。ぢやあ、小僧。お前、あの梅の枝を花を散らさずに切り落すことが出來るかい。

童子　何でだい。

武藏　何でゝもいゝ。

童子　何でゝもいゝ？　へっ、馬鹿にしてゐらあ。そんなこと

出來るにきまつてゐるぢやあないか。

武藏　ぢやあ、切つて見ろ、その、お前の持つてゐる笛で。

童子　ようし。しつかり見ておいで。（梅の枝をきつと睨んで、一心に笛で打ちおろす）えいっ！

見事に切り落す。花は地に枝が落ちて、はじめて散る。

武藏　うむ、見事々々。ちつとはやれるな。

木の枝に來て囀つてゐた小鳥、一度ばた〳〵と逃げるが、また來て止まる。

童子　ようし。ぢやあ、今度はをぢさんの番だよ。をぢさん、あの鳥を落して御覽

武藏　あの鳥を。何でだ。

童子　何でゝもいゝや。

武藏（笑つて）そんなことは子供にだつて出來るが、無闇に殺生するのは面白くない。

童子　といふ柄でもないらしいね。そんなことをいつて、ごまかすんだらう。

武藏　どうも山の中の小僧をつかまへて腕比べも氣が利かないが、お前があんまり思ひあがつて氣違にならないやうに、ぢやあ一つあの鳥を氣絕さしてくれるか。（短刀の手裏劍を拔き、ぱつと鳥を睨んだまゝ身動きもしない。投げる）えいっ！

鳥が翼を射拔かれて落ちる。

童子　ふむ。確に落ちた。町の人間にしちやあ大出來だ。下手のまぐれ當りといふこともあるが。

武藏　名人のまぐれ外れといふこともある。（鳥を拾つて、手裏劍を

拭き）お前はいゝ災難だつたな。さあもう一度生きて飛べ。（鳥を投げ放つて、手裏劍を拭き、刀にをさめながら）さてそれはともかく、今夜は何處かこの山の中で泊めて貰はなくちやあならないが、まだよつぽど遠いのかね。

童子　何、もうぢきそこだよ。尤もをぢさんの足なら、一晩中かかるかも知れないが。（遠くの山を指さして）ほら、あすこに雪のある山が見えるだらう。あの峠を越すと、半里ぐらゐのものだよ。

武藏　ふむ。なるほど烏天狗の棲みさうな處だな。

童子（何か想像して笑ひながら）おゝ面白い、面白い。ピキピッ。（と、笛を吹く）

武藏　何が面白いんだ。お前の先生の鼻がをぢさんに折られ

るのが面白いのかい。

童子（またピキピッと笛を吹く）さあ行かう、行かう。日が暮れる。（さつ、さと橋にかゝる）

武藏　まあ待て、待て。何もさう急ぐことはない。折角こんないゝ景色の處へ來たんだ。

童子　はゝあ。それでをぢさんはのろいんだね、景色を眺めてゐるんで。

武藏　さうさ。かう見えても、をぢさんは繪書きだからね。

童子　何、繪書きだつて？　をぢさんがかい。へえ。何でも出來るんだね。（と、また近寄つて來て）ぢやあ、一つあの瀧を描いちやあどうだい。

武藏　何、瀧がある。何處に。（と、指さゝれた方を見る）

童子　ほら、あすこにさ！（といひざまぽかりと笛で武藏の頭を打つ）

武藏、同時に體をかはして童子を打たうとする。童子はすばやくまた橋の上へ來てしまつてゐる。

武藏　小僧。そんないたづらをしようたつて駄目だ。

童子（手を叩く）駄目ならおいで。こゝまでおいでだ。ピキピッ。

武藏　ふむ。猪口才な猿奴。（と、橋を渡らうとするが、渡り得ない）

童子　あはゝゝゝ。これやあ面白い。雀天狗の綱渡り。東西東西。

武藏（汗をかく）生意氣いふな。何だ。こんなもの。

童子　こんなもの。おつとあぶない。こんなもの。がた〳〵顫へて、こんなもの！

武藏と童子（第八場より）

武藏（一旦引返す）木のぼりぢやあ猿に負けるよ、人間は。

といつてゐるところへ、一人の頭巾をかぶつた盲、杖をついてさしかゝる。盲は杖でさぐり〳〵橋にかゝり、すつと渡つてしまふ。

童子　あはゝゝ。盲の渡れる橋を眼あきが渡れない。盲は人間ぢやあないのかい。

武藏腕を組んで考へ込む。

童子　あはゝゝ。これあ面白い。盲の渡る橋で立往生。それでも一かどの天狗なり。

武藏また決心して橋の中ほどまで行くが、どうしても渡れない。

童子　落ちれば下は千仞の谷。暗くなればます〳〵あぶない。

命が惜しけりやあ、歸れ〳〵。（姿が見えなくなる）

武藏（眼をつぶる。舌打して）えゝ。この武藏にこんな橋ぐらゐが渡れなくつてどうする。（また渡らうとするが、つい足がすくむ）

から〳〵といふ童子の笑聲。段々日が暮れて薄暗くなる。

武藏　盲は渡れ、眼あきのおれが渡れない。これは何のわけか。（また眼をつぶつて決心し、渡らうとしては立ちすくみ、立ちすくんではまた眼を閉ぢる）眼で渡るものは渡れず、眼に依らないで渡るものは渡れる。ようし。

また遠くで笛の音。

あたりはめつきり暗くなり、月が段々光つて來る。

谷川の音はます〳〵冴える。

武藏、橋の上に立つたまゝ頻りに苦心する。

塚原卜傳
室町時代中期から末期にかけての劍客

第二場

嶺の上の塚原卜傳の庵。
太い老松の下。
卜傳、白髮の老人、一人圍爐裏の傍に坐して、鍋の火をいぢくつてゐる。
松風の音。

卜傳　歸つたかい。

童子　只今。（障子をあけて這入つて來る）

障子の外に、松の枝にかゝつた月が見える。障子を締める。

卜傳　どうした。何か獵はあつたか。

童子　えゝ、天狗を一匹。

卜傳　何、また天狗か。よくゐるな。

童子　尤もむかふはむかふで、おんなじことをいつてゐましたがね。先生のことを烏天狗だらうなんて。

卜傳　さうか。それは面白いな。――まあこゝへ來てあたれ。――さうして、そのほんたうの天狗はどうした。つかまへては來られなかつたのか。

童子　（爐へ來てあたりながら）つかまへて來てやらうと思つたんですが、面倒だからあの橋に置いて來てしまひました。はゝ、面白う御座んしたよ。ちやうど何處から來たのか、一人の盲がそこへ通りかゝつて、樂々と渡つてしまつたあの橋を、その高慢ちきな武士がどうしても渡れないで、口惜しがつてゐるざまといつたら……。

卜傳　今日は何かあの罠に鳥がかゝりさうな氣がしてゐたの

だ。いゝ鳥がかゝつてくれると、あの人よけの橋も存外役に立つといふもんだ。

童子　それならその鳥はあの贋天狗ぢやあなくて、その不思議な盲です。實は私も驚いたのです。何しろあの橋をあんな風にやす〳〵と渡れるのは、まあ先生と私ぐらゐのものとばつかり思つてゐましたからね。

卜傳　確に盲が渡つたな。それはわしも見た。

童子　え。

卜傳（笑ひながら）　どうもお前の盲にはわしも驚いたよ。こんなものを落して行つて、知らずにゐるんだからな。（と、先刻武藏の射落した鳥を放り出して見せる）

童子（卜傳の顏と鳥とを見比べながら）え。　では、あの盲が先生だつた

んですか。

卜傳　はゝゝ。　お前もまだあんまり人のことを贋天狗だなぞとは笑へないな。　實は先刻、あの隣山の木樵の家までちよつと油を貰ひに行つた歸りに、あの釣橋の傍まで來ると、この鳥がばた〳〵と飛んでは落ち、飛んでは落ちしてゐるのをつかまへて見ると、見事に翼を射拔かれた跡がある。（鳥を示して）　この傷がどういふことを示してゐるか、お前に分るか。　これは確に凡庸の者に出來る技ではない。　この鳥を殺さずに射落すことはお前にも出來ない。　だが、眞の名人なら、またこんなに深い傷を負はせて酷い生殺しにすることもないのだ。　明にこれはこの鳥を活かすつもりで、活かしそこねてゐるのだ。　わしにはこの射手の腕前とそ

の心持との段階が、眼に見るやうにはつきりと分る。ともかく、わしはそこでこの哀れな鳥をひねつてまた來かゝると、お前達の頻りに言ひ爭ふ聲が耳に這入つた。（童子は頭を擡げて、頻りに恐縮してゐる）何で爭つてゐるのかわしにはすぐ分つたが、わしが飛び出してしまつては面白くないと思つて、ちよつと盲に化けて見たのだ。

童子　どうも私もあとで變だとは氣がついたんです。こんなところにあんな盲が來るわけはないと思つて。でも、まさか先生がそんな芝居までお上手だとは思ひませんでしたからね。

ト傳　はゝ。だが、昔わしの師匠が自身の流儀を發明したのは、飛驒（ひだ）の山中で、やはり自分の渡れずにゐる橋を盲が渡るの

師匠　上野國の人で上泉伊勢といつた、神陰流の祖

を見たからだつた。わしはふとそれを思ひ出して、あの武士のためにその盲を眞似てやつたのだ。

童子　それは私だつて慣れてゐるんでなければ、ちよつとあの橋を渡れはしないでせうからね。が、あの武士の奴、すつかり先生を盲と思ひ込んで、口惜しがつてゐるんだから滑稽です。

ト傳　昔天竺の或馬鹿正直な坊主がいたづらな仲間にからかはれて、「これでなぐられると、お前は阿羅漢になれるぞ」といはれて、冗談に棒でなぐられたら、その坊主がほんたうに阿羅漢になつてしまつたといふ話がある。あの武士がわしの心持をほんたうに受入れてあの橋を渡つたら、渡つた時には雀が烏になつてゐるのだ。油斷は出來ないぞ。——

天竺　印度

阿羅漢　佛敎で菩薩の次に位するものをいふ

暗くなつた。明りをおつけ。

童子明りをつける。松風の音。

ト傳　もう少しこつちへ出しておいてやれ。山の中で明りを見るのは有難いものだ。

童子（明りを障子近く置いて）先生はあの武士が來ると思つていらつしやるんですか。

ト傳　どうかね。だが、あいつは一旦踏込んだ道を、あの橋ぐらゐでおめ〳〵後へ引返すやうな奴でもあるまい。事によつたら、もうその邊まで來てゐるかも知れない。

童子　ほんたうに來ると面白いがな。――まだ煮えないんですか。

ト傳　芋か。（鍋の蓋をあけて）うむ。もう煮えたらう。（聲高く）ぢ

やあ飯にしよう。ちよつとその鍋の蓋をあけて御覽。（と、頤で障子をさす）

童子さつと障子をあけると、そこに武藏が立つてゐる。

童子　ほう、來たね。をぢさん。先刻は失敬。何か用かい。

武藏（不意を食ひ、また卜傳の樣子を見て少したじろぐが、何食はぬ體に）橋を渡して貰つた禮に來たのだ。

ト傳　それは殊勝だ。では、その禮を見せて貰はうか。

武藏（きつと卜傳を睨んでゐたが、矢庭に刀を拔くより早く躍り入り）その禮はかうだ。（といひざま、斬りかゝる）

ト傳同時に鍋の蓋を取つて受け、身構へる。

武藏は刀を振りあげたまゝ、卜傳は泰然と身構へたまゝ、緊張しきつた數十秒。その間に武藏の體は段々顫へて來、息

たじろぐ　尻込する

殊勝だ　感心である

矢庭に　その場に、すぐさま

がせはしくなる。額に汗がにじむ。武藏が次第に壓迫されて、おのづと後じさりした時、一齊に二人の「えいっ！」といふすさまじい聲が聞える。その瞬間に武藏は刀を投げ出して、卜傳の前に捻ち伏せられたやうに平伏する。

武藏　恐入りました。この未熟な私が僭越にもあなたをためしたことをお宥し下さい。あなたは塚原先生ではいらつしやいませんか。

僭越にも　身の程を知らずに

武藏と卜傳との試合

卜傳　そちらは宮本氏ではないか。

武藏　恐入ります。失禮の段はいかほどお責め下さつても忍びますが何卒今後御指導下さることは願はれますまいか。

卜傳　宮本氏といへば、近來での達人といふことを傳へ聞いてゐる。そのやうな達人をこの烏天狗が指導するなぞとは

（月岡芳年筆）

以ての外だ。

武藏　その達人とやらがいかにみじめにもふつゝかな者であるかは、今現に御覽の通りで御座ります。この私も今が今までそれを覺らず、實はたゞ世に愚人が多いといふだけのために、ふは〳〵と持上げられた空名を、笑止にも眞の價値と已に許してゐたので御座ります。愚人の取沙汰を嘲笑だけはしながら、いつの間にか世を甘く見ていゝ氣になつてゐた自分が恥かしくてなりません。

卜傳　いや、別に恥ぢられることはあるまい。確に非凡なお腕だ。「この塚原でなかつたら、身は見事眞二つになつたことであらう」。だが、實の話、人を指導するなぞといふ世間への義理は、わしはもう背負はぬでもいゝことにしてゐるのだ。

それはお斷り申す。

武藏　では、せめてお傍において下さることは？

卜傳　それは迷惑だ。こゝは宿屋ではない。見られる通りの破れ小屋だ。わし達二人でぎゆう〳〵なのだ。（椀に鍋のものを注ぎながら童子に）さあ飯にしよう。

卜傳と童子とは飯を食ひはじめる。

卜傳　お望の手合せはして上げた。さあ、用が濟んだら歸つたらよかからう。

武藏　何と仰せられても私は歸りません。私が決心して家を出たのは、もと〳〵先生のやうな方にお目にかゝつて、道を聞くためです。まさかこんな處でその先生にお目にかゝれようとは、夢にも思ひませんでしたけれども、運よくお遇

ひ出來た以上、私は聞くべきものを聞くまでは、死んでもここをどきません。

卜傳　道を聞かうとする者が師匠と同じ座に坐つて、それを賴む馬鹿があるか。

武藏は外へ飛び出して、卜傳の方に向ひ上下座をする。

卜傳　寒い。そこを締めろ。

童子障子を締める。

卜傳　濟んだらおさげ。そして茶碗を洗つたら、御苦勞だがまた水を一杯汲んで來て貰ふのだな。

童子　はい。（茶碗などをさげる）

武藏　お願ひです。私に水を汲まして下さいませんか。

童子　どうしませう。

卜傳　汲みたいといふなら、汲ましてやれ。

武藏　（喜びに滿ちて）お許し下さるのですか。

童子　許してはあげるよ。だが、何處へ汲みに行くと思ふんだい。先刻君ががた〳〵顫へながら渡つたあの橋の谷だぜ。深い〳〵谷だ。

武藏　お易い御用です。千遍でも行つて來ます。

童子　道は暗いよ。岩は辷るよ。命がけだよ。（去る）

武藏　命は初から賭けてゐるんです。

童子　（桶を持つて出て來る）そら來た。いゝかい。（障子をあけ桶をわたす）

武藏　行つて來ます。（欣々として闇の中に去る）

童子　（それを見送つて）はゝ。これは有難いや。（また去る）

ト傳（涙ぐむ）有難いものだな。道はどうしてかう絶えないものなのか。

武道の精神

童子（また出て來る）あゝまた月が出て來ました。これなら道が見えるだらう。――締めませうか。

ト傳　まあいゝ。あけておけ。

童子また障子をあける。松の枝に月がかゝつてゐる。

松風の音。幕（陶淵明）

たゞ一とほり讀むだけでも面白い。武藏もト傳も共によく描かれてゐるが何といつても、試合の一段こそは文中で殊にすぐれたところである。そればかりでなく、結末の方に行くにつれて、段々深い意味がうかゞはれるやうに出來てゐるので、人をして何か考へさせないではおかぬものとなつてゐる。

三　童謠三篇

○尾上の松

野口雨情

野口雨情（ウジョウ）名は英吉、茨城縣の人、詩人、明治十五年生

尾上　峯の上

尾上の松に
鶴が來てとまりや、
鶴が來てとまりや、

松葉がパーラパラ。

松葉の數は
一本々々數へりや、
千年かゝる。

千年目にも
鶴が來てとまりや、
鶴が來てとまりや、

松葉がパーラパラ。

松葉の數が
一本々々數へりや、
萬年かゝる。

（日本詩集）

西條八十
東京の人、詩人、明治二十五年生

○かくれんぼ

思ひ出すのは

西條八十

かくれんぼ

待てど暮らせど
來ぬ鬼は、

さびしい納屋の
欞子から、

欞子
窓につけてある格子

そつとのぞけば
裏庭の、

柿の木にゐた

みそさゞい。（蠟人形）

若山牧水
名は繁、宮崎縣の人、歌人、昭和三年歿、年四十四

○はだか

若山牧水

裏の田圃で、
水いたづらをしてゐたら、
蛙が一匹、
草のかげからぴよんと出て、
はだかだ、はだかだと鳴いた。
やい、蛙、
おまへだつてはだかだ。（日本童謠選集）

「尾上の松」は繰返しを主として、まことに手際よく出來てゐる。「かく

れんぼ」は歌ひぶりのあつさりしてゐるのにも拘らず、はつきりと感じが出てゐる。「はだか」は投げやりのやうなところに、却つて飾らぬ面白さがある。

村松梢風
名は義一、靜岡縣の人、文學者、明治二十二年生

四　天の橋立

空は朝から曇つてゐた。私は宿でこしらへてくれた折詰の辨當を携へて、十時頃に文殊行の發動機船に乘つた。文殊までは一里足らずの海上であつた。船はぢきに切戸の南側に着いた。切戸の幅は僅に三四十間ぐらゐのものであつた。そこを小舟で渡ると、はじめて橋立の土を蹈むのであつた。

濕つた砂地へ下駄の齒がさく〳〵とさはるのが心地よく感

じられた。小松を植ゑてある間を二三町行くと、陸地の幅が急に廣くなつて來た。あたりの松は老いに老いて、さまゞに變つた形態を競つてゐた。橋立明神の祠の前に私は額づいた。

風情松村

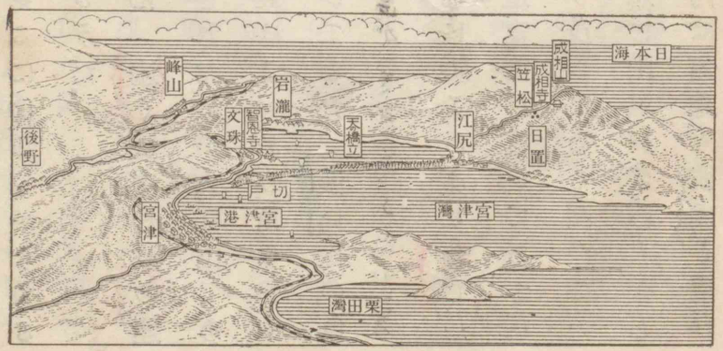
幅の廣い砥のやうな路が眞直につゞいてゐた。兩側の松の樹や海の色に見とれながら歩いてゐる私の後から、荷を背負つた旅商人と見える親仁が追ひついて來た。道づれになつて訊くと、丹後の筆屋だといつた。

二十八町の橋立を歩きつくしてしまつた處に村落があつた。漁師の家が主らしいが、往來に沿うた處には、宿屋だの茶店だ

のがあつた。村落の背後から、成相山へ登る急坂がはじまつてゐた。私は少し登つては木の根や岩角に腰を掛けて休んだ。蟬がやかましく鳴いてゐた。樹間から碧い海がちら〳〵見えた。制服の上に絲經を着込んだ學生連が威勢よく私を追越して行つたり、都會の夫婦者が山駕籠に乘つて通つたりした。私は順禮の夫婦者と一緒になつたが、やがて石に腰を掛けてその話を聞いた。

絲經　もとは麻と藁で織つた一種の筵をいふ、こゝでは雨などを防ぐために旅行者の用ひるござの類をさす

六町程登つた處に茶店があつた。そ



こには有名な笠松があつた。橋立を見るには、こゝからするのが一番よいと、昔からいはれてゐるさうだ。

今通つて來た村落はすぐ眞下に見えた。遠くには丹波の連山が見えた。その中で最も嶮しい形をしたのが大江山である。茶店の老婆が教へてくれた。橋立はこゝから見ると、やはすかひに海を二つに仕切つて伸びてゐた。濃い綠の色が海にまで溶けて流れ込んでゐた。半島がつき出てゐるといふ意辨當をつかつてから、毛布の上に仰向けに寢ころんだりした。成相寺まではそこから十二町あると、道案内に書いてあつた。坂口は緩やかになつてゐた。茅ばかり茂つてゐる圓つこい山が奥へ〳〵と重なり合つてゐた。急に山風がざわ〳〵と吹いて來た。山門は殆ど大破して、境内は何處も彼處も荒れ

御詠歌 順禮などが唱へる一種の歌

賴光 源氏、平安朝時代末期の武將

衆徒 僧徒

下し文 特別の役所からその管内へ下した文書

果て、茅葺の本堂も遠い古の世を想はせるやうな朽ちた建物であつた。本堂では、先刻の巡禮夫婦が筵の上に坐つて鉦を鳴らしながら御詠歌をあげてゐた。「波の音、松のひゞきもなりあひの、風吹きわたすあまのはし立」と、御詠歌を書いた額が眞黑く煤びた欄間にいくつも懸けてあつた。傍の札賣場には、駄菓子でも入れさうな箱の中に、御札や繪葉書を僅かばかりならべて、その横に番人の男がいぎたなく睡り込んでゐた。繪葉書の中には、昔賴光が大江山の賊退治の時、この寺の衆徒へ向けて加勢を促して來た下し文の寫眞などもあつた。

昔佛法を修行する一人の僧があつた。或年の冬、たゞ一人でこの山寺へ籠つて暮らした。すると、大雪が降つて來て、樹木も谷も雪に埋れてしまつて、里へ下りることが出來なくなつ

た。かうして、日數を重ねてゐるうちに、僧は貯の糧を食ひ盡してしまつたが、里へ行く道が絶えてゐるので、どうすることも出來ない。飢は次第に加はつて來て、今はたゞ死を待つより外に仕方がなかつた。僧はいよ〳〵心細くなつた。そして、自ら死ぬ覺悟をきめながらも、佛前に坐して一心に觀音を念じた。

乾（西北）

すると、堂の乾の角にあたつて、大きな物音がした。僧がよろぼひ出て、戸の破れから覗いて見ると、狼に嚙まれた猪が寺の縁先へ來て、死んで倒れてゐた。これこそ觀音の與へ給ふ物であらう。食べようと思つたが、年來佛を賴む身で、どうして生類の肉が食べられよう。僧は幾度か思ひ返したが、何物も飢の苦しみには勝てなかつた。猪の左右の踝の肉を屠り取

り、鍋に入れて煮て食べた。その味の旨い事は比べる物もないほどで、何ともいへぬすが〳〵しい氣持になつた。しかし、すぐ後から、自身の犯した重罪に思ひ當ると、怖ろしくなつた。年來の修行も一朝にしてあだになつて、佛も菩薩も我が身から遠ざかつてしまつたかと思ふと、悲しかつた。そして、經も讀まずに泣き臥してゐた。

すが〳〵しい（せい〳〵した）

とかくするうちに雪も止んだ。里人等は僧の身を案じて、雪を分けて山へ登つて來た。

「この寺に籠つてゐた僧はどうなつたであらう。雪は深く、人通りの跡もない。もう日數も過ぎてゐるから、食べる物もない筈だ。寺の内に人氣もないのは、大方死んだのであらう。」

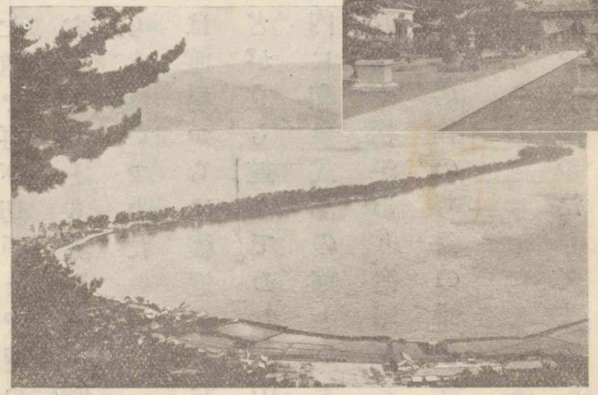
かういふ言葉が僧の耳に聞えた。僧はまづどうかしてこの猪を隠したいと思つたが、隠す場所がなかつた。自分の食べ殘した肉もまだ鍋の中にあつた。そこへ里人等は外から戸をあけて這入つて來たが、達者で生きてゐる僧の姿を見ると、みな驚いて、聖はいつたい今日までどうして命を繋いでゐたのか」といつて、不思議がつた。僧は恥ぢて、答へなかつた。人人は怪しんで、寺の内を廻つて見ると、鍋があつた。そこでその蓋を取ると、檜の木の切れはしが入れて煮てあつた。

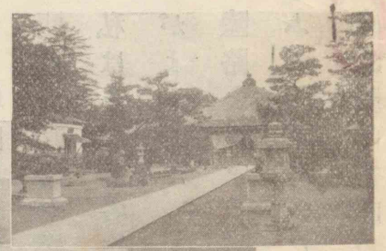
「いかに飢ゑたとはいへ、よくも木を食つて生きてゐられたものだ」。

人々はかういつて、頻りにあはれがつた。

僧は驚いて、自分も鍋の中を見ると、猪の肉と思つて食べてゐ

今昔物語
いろ〳〵の説話を集めた書、源隆國の著





→文殊堂

天の橋立

たのは、里人のいつた通り檜の木の切れはしであつた。さてこそ誠に觀音の加護であつたかと、僧は有難涙にむせびながら、はじめて仔細を物語つた。

人々は驚き、かつ尊く覺えて、打連れて佛像の前に行つた。すると觀音の兩の踝が生々しく切取られてゐた。

この話は今昔物語に載つてゐる。

和泉式部（いずみしきぶ）
平安朝時代中期の女流歌人

もと來た道を再び切戸まで戻つた。切戸の附近には葦が茂つてゐた。ちつとも流れない瑠璃色に澄んだ水中に、鰡（はら）や鯵（あじ）がいくらも泳いでゐた。

文殊堂は渡場からは程近かつた。門前には宿屋や名物を賣る店などが立ち竝んでゐた。山門も堂も古くて見事であつた。境内に和泉式部の墓といふのもあつた。

門前には櫻や松があり、宿屋なども相應に綺麗なのがあつた。私はそこで名物の「ちゑの餅」を食べた。その店も古くて氣持がよかつた。

陸路を歩いて歸つた。文殊から二三町來た處に、涙が磯といふ舊蹟があつた。淺い磯が往來の際まで入込んでゐて、その汀に、水牛のやうな滑かな石が大きな皺を寄せて、横たはつて

芥川龍之介
東京の人、文學者、昭和二年歿、年三十六

ゐる。石と石との隙間から松の木が一本生えて、低く這つた枝を水の上まで差出してゐる。誰が植ゑたのか、松の根方には一株の紫陽花（あぢさゐ）が盛りの花をつけてゐた。向ふの洲（す）には一面に葦が茂つてゐて、その上を赤い蜻蛉が群れて飛んでゐた。

（屋上の鴉）

おとなしく正直に書かれてゐる。中に昔の物語を挿んだのはこの文章に大きな特色をつけたわけで、そのためにたゞの紀行文ではない、特に面白く生き〳〵したものになつてゐる。

五　黑衣聖母

「どうです、これは。」

田代君はかういひながら、一體の麻利耶（マリヤ）觀音を卓子の上に載

せて見せた。

麻利耶觀音と稱するのに、切支丹宗門禁制時代の天主教徒がしば〳〵聖母麻利耶の代りに禮拜したもので、多くは白磁の觀音像である。が、今田代君が見せてくれたのは、その麻利耶觀音の中でも、博物館や世間普通の蒐集家のキャビネット(Cabinet)にあるやうなものではない。第一、これは顏を除いて他は悉く黑檀を刻んだ、一尺ばかりの立像である。のみならず、頸のまはりに懸けた十字架形の瓔珞も、金と青貝とを象嵌した極めて精巧な細工らしい。その上、顏は美しい象牙で、しかも、唇には珊瑚のやうな一點の朱まで加へてある。

キャビネット陳列室

私は默つて腕を組んだまゝ、暫くはこの黑衣聖母の美しい顏を眺めてゐた。が、眺めてゐるうちに、何か怪しい表情が象牙

の顏の何處かに漂つてゐるやうな心持がした。いや、怪しいといつたのでは物足りない。私には、その顏全體が或惡意を帶びた嘲笑を漲らしてゐるやうな氣さへしたのである。

「どうです、これは」

芥川龍之介(故人)

田代君はあらゆる蒐集家に共通な誇の微笑を浮べながら、卓子の上の麻利耶觀音と私の顏とを見比べて、もう一度かう繰返した。

「これは珍品ですね。が、何だかこの顏には無氣味な所があるやうではありませんか。」

「圓滿具足の相好とは行きませんかな。さういへば、この麻利耶觀音には妙な傳說が附隨してゐるのです。」

圓滿具足の相好　少しの不足もないすがた、みち足つてゐるかたち

「妙な傳說？」

私は眼を麻利耶觀音から思はず田代君の顏に移した。田代君は存外眞面目な表情を浮べながら、ちよいとその麻利耶觀音を卓子の上から取上げたが、すぐにまた元の位置に戻して、

「えゝ、これは禍を轉じて福とする代りに、福を轉じて禍とする、緣起の惡い聖母だといふことですよ。」

「まさか。」

「所が、實際さういふ事實が持主にあつたといふのです。田代君は椅子に腰をおろすと、殆ど物思はしげなとも形容すべき陰鬱な眼つきになりながら、私にも卓子の向ふの椅子へ掛けろといふ手眞似をして見せた。

「ほんたうですか。」

超自然的現象
自然界の法則にかゝはらずに生ずるとされるやうな現象、普通の道理で推せない不思議なこと

私は椅子へ掛けると同時に、われ知らずあやしい聲を出した。田代君は私より一二年前に大學を卒業した、秀才の聞えのある法學士である。また私の知つてゐる限り、いはゆる超自然的現象には少しの信用も置いてゐない、教養に富んだ新思想家である。その田代君がこんなことをいひ出す以上、まさか、その妙な傳說といふのも、とりとめのない怪談ではあるまい。

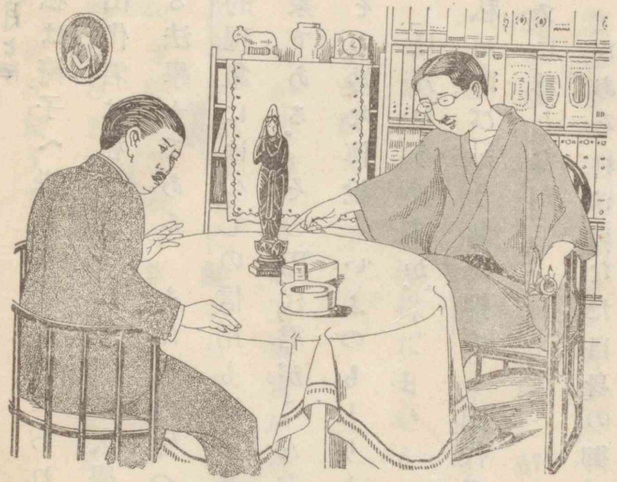
「ほんたうですか。」

私が再びかう念を押すと、田代君はマッチ(Match)の火を徐ろにパイプ(Pipe)に移しながら、

「さあ、それはあなた自身の御判斷に任せるより外はありますまい。が、ともかくも、この麻利耶觀音には氣味の惡い因緣があるのださうです。御退屈でなければお話しますが。」

素封家
ものもち、金持

この麻利耶觀音は私の手に這入る以前、新潟縣の或素封家にあつたのです。



この麻利耶觀音は……

勿論骨董としてあつたのではなく、一家の繁榮を祈るべき宗門神としてあつたのです。

その家の當主といふのは私とはちやうど同期の法學士で、これが會社にも手を出してゐるなか〳〵の事業

浦賀
神奈川縣
嘉永の末年
嘉永六年(一八五三)

家なのです。そんな關係上、私も一二度彼のために或便宜を計つてやつたことがありました。その禮心だつたのでせう、彼は或年上京した序に彼の家重代の麻利耶觀音を私にくれて行つたのです。私のいふ妙な傳說といふのも、その時彼の口から聞いたのですが、彼自身は勿論さういふ不思議を信じてゐる譯でも何でもありません。たゞ母親から聞かされた通り、この聖母のいはれ因緣をざつと說明したに過ぎなかつたのです。

何でも彼の母親が十か十一の秋だつたさうです。年代にすると、黑船が浦賀の港を騷がせた嘉永の末年にでも當りますか、その母親の弟に當る、茂作といふ八つばかりの男の子が重い痲疹(はしか)に罹つたさうです。彼の母親は名をお榮と呼ぶので

すが、その二三年前の疫病に父母共に世を去つて以來、この茂作と姉弟二人、もう七十を越した祖母の手に育てられて來たのださうです。ですから、茂作が重病になると、彼には曾祖母に當る、その切髪の隱居の心配といふものは一通りや二通りではなかつたさうです。しかし、いくら醫者が手を盡しても、茂作の病氣は重くなるばかりで、殆ど一週間と經たないうちに、もう今日か明日かといふ容態になつてしまつたさうです。

「すると、或夜のこと、お榮のよく寢入つてゐる部屋へ突然祖母が這入つて來て、睡がるお榮を無理に抱き起して、人手も借りず甲斐々々しくちやんと着物を着換へさせたさうです。お榮はまだ夢でも見てゐるやうなぼんやりした心持でゐましたが、祖母はすぐにその手を引いて、薄暗い雪洞（ぼんぼり）に人氣のない

廊下を照らしながら、晝でも滅多に這入つたことのない土藏にお榮を連れて行つたさうです。

土藏の奥には、昔から火伏せの稻荷が祀つてあるといふ白木のお宮があつたさうです。祖母は帶の間から鍵を出して、そのお宮の扉をあけましたが、今雪洞の光に透して見ると、古びた錦の御帳の後に、端然と立つてゐる御神體は、外でもないこの麻利耶觀音だつたさうです。お榮はそれを見ると同時に、急にこほろぎの鳴く聲さへしない眞夜中の土藏が怖くなつて、思はず祖母の膝に縋りついたまゝ、しく〳〵泣き出してしまつたさうです。が、祖母はいつもと違つて、お榮の泣くのにも頓着せず、その麻利耶觀音のお宮の前に坐りながら、恭しく額に十字を切つて、何かお榮に分らない御祈禱をあげはじめ

端然と　正しく、きちんと

たさうです。

それが凡そ十分あまりも續いてから、祖母は靜に孫娘を抱き起すと、怖がるのを頻りに宥め〳〵、自分の隣に坐らせました。さうして、今度はお榮にも分るやうに、この黑檀の麻利耶觀音にこんな願をかけはじめたさうです。

「聖麻利耶（サンタ Santa）樣、私が天にも地にも杖柱と賴んでをりますのは、當年八歲の孫の茂作と、こゝに連れて參りました姉のお榮ばかりで御座います。お榮も御覽の通り、まだ一人前といふ年でも御座いません。もし只今茂作の身に萬一のことでも御座いましたら、この家は明日が日にも世嗣が絕えてしまふので御座います。そのやうな不祥事が御座いませんやうに、どうか茂作の一命をお守りなさつて下さいまし。

それも私風情の信心には及ばないことで御座いましたら、せめては私の息の御座います限り、茂作の命をお助け下さいまし。私も取る年で御座いますから、靈魂を天主にお捧げ申すのも遠い後では御座いますまい。しかし、それまでには、孫のお榮も不慮の災難でも御座いませなんだら、大方年頃になるで御座いませう。

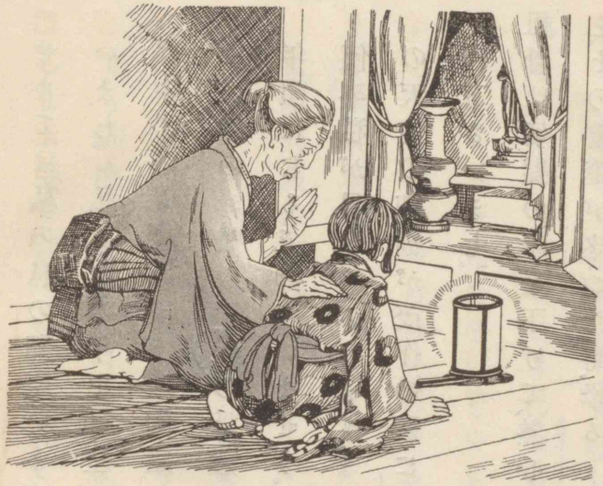
何卒私が目をつぶりますまでゝ宜しう御座いますから、死の天使の御劍が茂作の體に觸れませんやう、御慈悲をお垂れ下さいまし」。

祖母は切髮の頭を下げて、熱心にかう祈つたさうです。すると、その言葉が終つた時、恐る〳〵顏を擡げたお榮の眼には、氣のせゐか麻利耶觀音が微笑したやうに見えたといふことで

す。お榮は勿論小さな聲を揚げて、また祖母の膝に縋りついたさうです。が、祖母は却つて滿足さうに孫娘の背をさすりながら、

「さあもうあちらへ行きませう。麻利耶樣は有難いことに、このお婆さんのお祈をお聞入れになつて下さつたからね。」

と、何度も繰返していつたさうです。



うせまき行へらちあうもあさ

さて明くる日になつて見ると、なるほど祖母の願が叶つたの

か、茂作は昨日よりも熱がさがつて、今まで夢中だつたのが、次第に正氣さへついて來たさうです。この樣子を見た祖母の喜びはなか〳〵口には盡せなかつたさうです。何でも、彼の母親は、その時祖母が笑ひながら涙をこぼしてゐた顏が忘れられないとかいつてゐたさうです。そのうちに、祖母は病氣の孫がすや〳〵睡り出したのを見て、自分も連夜の看病疲れを暫く休めるつもりだつたのでせう、病室の隣へ床をとらせて、珍しくそこへ横になつたさうです。

その時、お榮はおはじきをしながら、祖母の枕もとに坐つてゐましたが、祖母は精根も盡きるほど疲れ果てゝゐたと見えて、全く死人のやうにすぐに寢入つてしまつたさうです。

所が、彼は時間ばかりすると、茂作の介抱をしてゐた女中が

そつと次の間の襖をあけて、「お嬢様、ちよいと御隱居様をお起し下さいまし。」と、あわてたやうな聲でいつたので、お榮は子供のことですから、早速祖母の側へ行つて、「お婆さん、お婆さん。」と二三度搔卷の袖を引いたさうです。が、どうしたのか、ふだんは眼敏い祖母が、その時に限つて、いくら呼んでも返事をする氣色さへ見せなかつたさうです。女中も不審さうに、病室からこちらへ這入つて來ましたが、これは祖母の顏を見ると、氣でも違つたかと思ふほど、いきなりその搔卷に縋りついて、「御隱居様、御隱居様。」と必死の涙聲を揚げはじめたさうです。けれども祖母は眼のまはりに微かな紫色を止めたまゝ、やはり身動きもせずに寢入つてゐたさうです。と間もなく、もう一人の女中があわたゞしく襖をあけたかと思ふと、これも色を

依然としてもとのまゝで

失つた顏を見せて、「御隱居様、――坊ちやんが、――御隱居様。」と、震へ聲で呼び立てたさうです。勿論この女中の「坊ちやんが、――」は、お榮の耳に明に茂作の容態の變つたことを知らせる力があつたさうです。が、祖母は依然として、今は枕もとに泣き伏した女中の聲も聞えないやうに、ぢつと眼をつぶつてゐたさうです。

茂作もそれから十分ばかりのうちに、たうとう息を引取りました。麻利耶觀音は約束通り、祖母の命のある間は茂作を殺さずに置いたのです。

田代君はかう話し終ると、また陰鬱な眼を擧げて、ぢつと私の顏を眺めた。

「どうです。あなたにはこの傳說がほんたうにあつたとは思はれませんか。」

私はためらつた。

「さあ、――しかし、――どうでせう。」

田代君は暫く默つてゐた。が、やがて煙の消えたパイプにもう一度火を移すと、

「私はほんたうにあつたかとも思ふのです。たゞそれがその聖母のせゐだつたかどうかは疑問ですが。さういへば、まだあなたはこの麻利耶觀音の臺座の銘をお讀みにならなかつたでせう。御覽なさい。こゝに刻んである文字を、『汝の祈禱、神々の定め給ふ所を動かさんと望む勿れ。』」

私はこの運命それ自身のやうな麻利耶觀音へ、思はず無氣味

な眼を移した。聖母は黑檀の衣をまとつたまゝやはりその美しい象牙の顏に、或惡意を帶びた嘲笑を永久に冷然と湛へてゐる。（現代小說全集）

話の筋が何となしに人を惹きつける。文章もそれにぴつたり調子を合せてゐる。主題になつてゐるお婆さんのまじめな人がらと、その祈を何處までも突き進めて行かうとする信心の深さとが、子供の病氣によつて極めてはつきりと浮き出てゐる。念の入つた、力の籠つた文章である。

長谷川辰之助
號は二葉亭四迷、東京の人、文學者、明治四十二年歿、年四十八

六　祖母

長谷川辰之助

子供の時分の事はもう大抵忘れてしまつたが、不思議にもはつきりと、昨日の事のやうに覺えてゐるのもある。中にも、こ

まさ〳〵とあり〳〵と、はつきりと

氣象性分、氣だて

れば かりは一生目の底に染み付いて忘れられまいと思ふのは、十歳の時に死別した祖母の顔だ。

今でも目をつぶると、すぐまざ〳〵と目の前に浮ぶ。面長の、老人だから無論皺は寄つてはゐたが、締つた口もとで段鼻で、なか〳〵上品な面相だつたが、目が大きくて、女としては強過ぎるほど權があつて、古屋――これが私の家の姓だ――の隱居の目といつたら、隨分評判の目だつたさうだ。なるほど、さういへば、何か氣に入らぬことがあつて、祖母が白目でじろりと睨むと、子供心にも何だか無氣味だつたやうな記憶がまだ殘つてゐる。

大抵の人は氣象が目に出るといふ。祖母がやはりそれだつた。全く目色のやうな氣象で、勝氣で鋭くて、よく何かに氣の

付く、口も八丁手も八丁といふ、一口にいへば男まさりの人だつたさうな。私は子供の事として一向夢中だつたが。

大きくなつて後に、親類の者などの話で聞くと、それが幾分か境遇の然らしめた所もあつたらしい。といふのは、早く祖父に死なれて、若い時から獨りで暮らして來た。それで、人一倍氣を張る。氣を張つて油斷をしなかつたから、一生人に後指をさゝれるやうな過失がなかつた代りに、あまり人にも好かれずに年をとつてしまつて、父の代となつた。

二葉亭四迷

父は祖母とはまるで違つてゐた。怪しいぐらゐに好人物で、顔もさつぱり似てゐなかつた。笑ふと目もとに小皺の寄る、

ふつくらした、いかにも愛嬌のある圓顔で、丈は高かつたが何處か圓味があり、心もその通り角がなかつた。快活でわだかまりがなくて、話が好きで、碁が好きで、暇さへあれば誰とでも相手になつて碁をうち、大きなくしやみを自慢にするほどの無邪氣な人だつた。祖父がやつぱりさうであつたといふから、大方その氣象を受け繼いだのだらう。

しよつちゆう 始終、いつも

父はこんな人だし、母はしよつちゆう手拭を姉様冠りにして、襷がけでよく働く人だつた。その頃の事を誰に聞いても、皆「お母さんはよく辛抱なさつた」とばかりで、他に何もいはぬから、私の記憶に殘るその時分の母は、いつまで經つても、やつぱり手拭を姉様冠りにして、襷がけでよく働くばかりで、格別どうといふこともない人である。

方寸 心、胸のうち

かういふ家庭であつたから、自然祖母が一家の實權を握つてゐた。家内中のことは一から十まで祖母の方寸に捌かれて、母は勿論、父も別に愚痴をこぼさなかつたやうだ。これほど權威を振つてゐた祖母ではあるが、どういふものだか、私にかかると全く意氣地がない。

何で祖母がさうなのか、それは私には分らなかつた。が、とにかく意氣地のなくなるのは事實で、評判の氣むづかし屋がどうにでも私の思ふやうになつてしまふ。

まづ何かほしい物がある。それもない物ねだりで、ある結構な菓子はいやで、ない駄菓子がほしいなどといひ出して、母にねだるが許されない。祖母にねだる。ちよつと澁る。首玉にかじりついて、「よう、よう」と二三度鼻聲で甘えると、もう祖母

不承々々氣がすゝまぬながら、しぶしぶに

は海鼠のやうになつて、「お由、――母の名だ、――あんなにいふんだから、買つておやりなさい。」といふ。祖母のお聲がかりだから、母も不承々々立つて、雨降りでも私の口のお使に傘傾けて出掛けようとする。こんなに私を甘やかすと、さすがの父ももう笑つてばかりはゐられなくなつて、小言をいふ。私が泣く。祖母の機嫌が悪い。

「こんな小さな者をそんなに苛めて育てゝ、もしか俊坊のやうな事にでもなつたら、どうおしだ。かはいさうぢやあないか。」といふのが口切で、ぽつり〳〵と始まる。俊坊といふのは私の兄で、私も虚弱だつたが、それ以上に虚弱で、六つの時に亡くなつたさうだ。それも急性胃加答兒でといふから、事によると、祖母がかはいがりごかしに、口を慎ませなかつた祟かも知

れない。しかし、虚弱な兒は大食させつけると丈夫になるといはれて、なるほどと思ふぐらゐの父だから、祖母の矛盾には氣がつかない。ありふれた「さうわがまゝをさせつけては」ぐらゐの所で切拔けようとする。祖母もそれはさう思はぬでもないから、内々自分が無理だと思ふだけに、却つて激して言葉が荒い。そこで、父は默つてしまふ。母も默つて出て行く。と、もう十分も經つと、私が兩手に飴を握つて、こをどりして喜ぶ顔を祖母が眺めて、ほく〳〵することになつてしまふ。

かうして、私の小さいながら際限のない慾が常に祖母を通して遂げられる。それは子供心にも、うす〳〵呑込めるから、自然家内中で私の一番好きなのは祖母で、「おばあさん」「おばあさん」と後を慕ふ。何となく祖母を御方のやうに思つてゐるか

ら、祖母が家にゐる時は、私は散々わがまゝをいつて悪たれて、したい三昧を仕散らすが、留守だといぢけるのではないが、餘程おとなしくなる。

その癖、私は祖母を小馬鹿にしてゐた。何となく奥底が見透されるやうで、祖母が何といつたつてちつとも恐れない。それをまた、勝氣な祖母が何とも思つてゐない。却つて小馬鹿にされるのが嬉しいやうに、人が來るとその話をして、「憎い奴で御座います。」といひ〳〵、ほく〳〵してゐる。

兩親もそれは同じことで、散々私に惱まされながら、やはり何とも思つてゐない。たゞ稀に、「おばあさんにも困る。」と、陰で愚痴をこぼすばかり。

私はどちらへ廻つても好い兒だつた。

人は「親馬鹿」と一口にいふけれども、親の馬鹿ほど有難いものはない。祖母は勿論、兩親とても決して馬鹿ではなかつたが、その馬鹿でなかつた人達が私のためには甘んじて馬鹿になつてくれた。今になつて見れば、勿體ないと感謝せずにはゐられない。（平凡）

櫻井忠溫
愛媛縣の人、軍人、明治十二年生

七　器械體操

細やかに、正直一方に、しかし、面白みのある筆で、第一に祖母の面目が寫されてゐる。そして、それにつけて孫やその親達やを出して來て、手近な平生の出來事から描きはじめてゐるので、どの人物も皆躍り立つばかりに、まことに尤もな、しつかりした文章になつてゐる。

櫻井忠溫

松浦先生
名は嚴暉

私が砂糖屋の大さんの離れで松浦先生にお目にかゝり、そして、その門人となつたのは十五の春であつた。先生は畫家で、大さんは息子である。

それから毎日、私は學校から歸ると、先生の宅へ行つた。先生から描いて貰つた手本を、唐紙の八つ切に描いて持つて行くのである。それを先生が一々手を取るやうにして直された。先生は丸々と太つた人であつた。

私はその後士官候補生になつた。繪書きが軍人になつたといふので、ひどく先生の機嫌を損じた。軍人にはなつたものゝ、私はそれまで荒つぽい仕事をしたことがなかつた。中學にゐる頃は、繪を描く外に友達と雜誌を作つたりしてゐた。鐵棒にぶらさがつたことはたゞの一度

もなかつた。それが軍隊に行けばさうはならぬ。私の一番困つたのは器械體操であつた。鐵棒にぶらさがつたが最後、びくとも動かないのだから、自分ながら愛想がつきてしまつた。軍曹のKさんは或日私にかういつた。

櫻井忠溫

「候補生は器械體操が出來なくてどうするか。ゆく〳〵兵卒に教へるなどといふことはとても出來ぬではないか。やる氣になれば出來ぬことはない。しつかり勉强せんといかん……」

私は全くKさんのいふとほりだと思つた。

私はその夜から床を拔け出て、器械體操場へ行つた。そこは舊城の內濠の傍にあつて、女が石垣から濠へおりて來て、水際

で泣くとかいふ恐ろしい話のある處で、夜中だれもこゝへ來るものはなかつた。私は鐵棒に飛びついて、どうかして足でも掛けて見ようと思つた。しかし、それは徒勞であつた。

城の森の中では、ほう〳〵と何かしら鳴いてゐた。何だか分らぬ音が時々森の中や濠の中でするので、その度毎にひやりとした。何度となく鐵棒に飛びついたけれども、疲れるばかりで、追々に體が動かなくなつた。諦めて歸つて來て、こつそりと床にもぐり込む。泣きたくなつたことが何度あつたか知れなかつた。

雨の降らぬ限りは、毎夜器械體操場へ出掛けて行つた。場所が場所だけに、月の晩はいろ〳〵のものゝ影が私をびくつかせた。闇であれば闇で、目の前に何か突つかゝつて來るやう

な氣がしたりした。

折々鐵棒に飛びつきそこなつて、ころんだり頭を打つたりしたこともあつた。鐵棒の柱に凭(もた)れて、何度泣いたか知れなかつた。

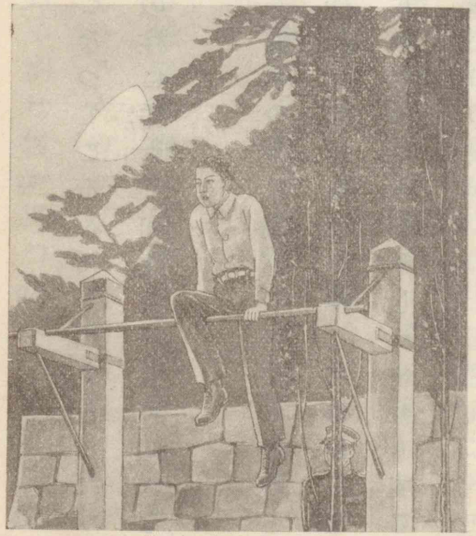
鐵棒をすかして見ながら、蛙のやうに飛びついた。けれども、私の足には鉛の棒でも仕込んであるのか、少しもあがらなかつた。そして、徒に腕をしやくつたり顔をしかめたりするだけであつた。

十日經つても十五日經つても、足はあがらなかつた。

十何日目の夜であつた。どういふはずみであつたか、足が棒にかゝつて、ひよいと輕く猿のやうに體があがつた。だれか突きあげてくれたやうに思はれた。私はふら〳〵しながら、

暫く鐵棒の上で四方の景色を眺めた。化物でも何でも來いといふ氣になつた。餡パンのやうな半圓の月が城の松の上にかゝつてゐた。

私の足は一方はまだ棒にかゝつたまゝである。そして、一方はぶらりと垂れさがつてゐる。兩手は臂を立てゝ、一所懸命に棒を握つてゐる。何だか體が高い宙にかゝつてゐるやうで、下を見ると地面が段々沈んで行くやうに見えた。



操體械器

次の夜が來た。昨夜の呼吸でうまくやらうと、莊重な態度で飛びついた。しかし、見事に失敗した。二度三度續けるうちに、尻が追々に重くなつた。

私は一日も休まなかつた。そのうちに、三度に一度は足がかかるやうになり、私の伎倆は何だか頼もしく思はれるやうになつた。

或日、私はK軍曹から呼ばれた。Kさんは、

「この頃、候補生は毎晩遲く何處かへ出て行くといふ評判だが、事實か。」

といつた。私はこれを聞くと、涙が滲(にじ)み出して來た。そして、何ともいはないで立つてゐた。すると、Kさんは、

「候補生は器械體操場に行つてゐるのだらう。」

といつた。

私はKさんがどうしてこんなことを知つてゐるのだらうと驚いた。

「はい。」

といつて、Kさんの顔を見上げた。

Kさんは暫く默つてゐた。

「候補生！　私のいつたことをよく聞いてくれた。私はこの十日前にはじめて候補生が毎晩ゐないといふことを聞いたので、それから氣をつけてゐると、なるほど床を抜けて出て行く。ついて行つて見ると、器械體操場なのだ」。

私の頰には涙が止め度もなく流れた。Kさんの前でなかつたら、聲を揚げて泣いたのであつたらう。

「それから私は毎晩のやうに、候補生のあとについて行つたのだ。候補生がいくらしても鐵棒にあがれないので、よつぽど出て行つて教へようかと思つたけれども、候補生の熱心できつと今に出來ると思つて、わざと陰で見てゐた」。

私はKさんの前に倒れさうになつた。Kさんがこんなにまで思つてゐてくれたかと思ふと、たまらなくなつた。

「この頃は大分うまくなつた。もう一息だ」。

Kさんは聲をうるませながら、私の肩を輕く叩いた。

私はその後少尉になつた。

Kさんとはそれから十年も遇はない。所が、この頃突然、函館にゐるといつて、手紙をくれた。

私は今にKさんの恩を忘れない。（煙幕）

筆に無駄がない。強ひて仰々しくして、人をあつといはせようといふたくらみなどは、何處にも見つからない。それでありながら、文章が活きてゐる。夜の寂しさを描いたところもよい、はじめて鐵棒にあがり得たことを描いたところもよい、軍曹に呼ばれていろ〳〵聞かれるあたりは一層よい。

泉鏡花

祭のこと

泉鏡花
名は鏡太郎、石川縣の人、文學者、明治六年生
中六番町
東京市麴町區

中六番町の魚屋へ行つて來た家内の話だが、そこのかみさんがおんぶしてゐる、誕生を濟したばかりの赤ん坊に、「みいちやん、お祭は、――お祭は？」と聞くと、小指の先ほどな小さな鼻をつまんではにこ〳〵、鼻をつまんではにこ〳〵する。

山王様のお渡りの時に見た猿田彦命の面を覺えてゐたのである。それから、「お獅子は？　みいちやん。」と聞くと、引掛けて

山王様
東京市麴町區にある日枝神社のこと

日の祭

(1)街の頭　(2)燈行繪　(3)言狂番茶　(4)子供等の　(5)分氣祭おの　(6)神酒所　(5)お旅所　(3)神輿渡御

ふさはしい　似つかはしい、相應してゐる

お會式　毎年十月中旬に行はれる日蓮宗の行事

ゐる半纏の兩袖を引張つて、取つてはかぶり取つてはかぶりしたさうである。

全くお祭は嬉しいものだ。

今日は梅雨の雨が朝から降つて、薄ら寒い。

泉鏡花

祭の夜はいつの年も暗いやうに思はれる。時候がちやうど梅雨にかゝるから、雨の降らない年の、月のある頃でも曇るのであらう。また大通りの絹張の繪行燈、横町々々の紅い軒提灯も、祭禮の夜は暗の方がふさはしい。月の紅提灯では納涼の氣分になる。それから、空の冴えた萬燈は霜のお會式を思はせる。

日中の暑さに、酒は飲んだし、血は煮える。御神輿かつぎは人

の元氣がものすごい。五十人・八十人・百何人、ひとかたまりの若い衆の顔は目がすわり唇が青くなつて、前向・横向・うしろ向、一つにでつちて、葡萄の房に一粒づつ目・口・鼻を描いたやうに、手足の筋は凌霄花の緋を欺く。

でつちて　こねあげて、まとめあはせて

凌霄花　草本で蔓がある、夏に大形の赤または黄色の花をつける

御神輿の柱の飾の珊瑚がぱつと咲き、銀の鈴が鳴りすわつて、鳳凰の翼、雞の雞冠がさつと汗ばむと、あつちこつちに揉む樣は、團扇の風、手の波にゆら〳〵と乘つて搖れ、すらりと大地を斜に流れるかとすれば、千本の腕の帆柱に、つと軒の上へ眞直に舞ひあがる。

「わつしよ、わつしよ、わつしよ、わつしよ。」

もうこの時は人が御神輿を擔ぐのでない。御神輿の方がいます靈と共に人の波を思ふまゝ釣るのである。そして、御神

輿は行きたい方へ行き、巡りたい方を巡る。殆ど人間業ではない。

揃の浴衣をはじめとして、「提灯の張替をお出し置き下さい。」「へい、戴きに出ました。」「えゝ、張替をお屆け申します。」「軒の花を掛けます。」と、入りかはり立ちかはり人が來る。二三日前から、もう町内は親類づきあひ。それもよい。テケテン〳〵、はや獅子が舞ひ歩く。

お神樂獅子・踊屋臺、町々の山車の飾、つくりもの・人形・生花。造花は櫻・牡丹・藤・つゝじ。生花はあやめ・姫百合・青楓。

こゝに神酒所といふのに、三寶を供へ、樽を据ゑ、緋の毛氈に青竹の埒。老舗の旦那、新店の若主人、番頭どん・小僧達も、町内の若い衆が陣取つて、將棋をさし碁を打つ。大皿の鮨は鐵砲が

鐵砲　海苔まきの鮨

銃口を揃へ、めざす敵の山葵のきいた鮪鮨はとくの昔討取られて、遠慮をした海鰻の甘いのが飴のやうに少々とろけて、蛤がはがれてゐる。つまの新蓼・青紫蘇が濃い緑や紫に凛然と立つた處は、どうやら畫間御神輿をかついだ時の君達の樣子に似てゐる。……消防手御免よ。兄哥怒るな。金屏風の鶴の前に、おかめ・ひよつとこ・くりからもん〳〵・肌ぬぎ・あぐら、中には素裸のもゐるではないか。そこが江戸だ、お祭だ。

くりからもん　背中に不動明王などの像を入墨したのをいふ

「わつしよい、わつしよい、わつしよい、こらしよい、わつしよい、こらしよい、わつしよ〳〵〳〵」。

夜が更けると紅の星が流れるやうに、町々の行燈、辻の萬燈、横町の提灯が一つ消え二つ消え、次第に暗く更けるまゝに、やゝ近い町、遠い辻に、近きは低く遠きは高く、森あれば森に渡り、風

あれば風に乘つて、子供まじりの聲々が、

「わつしよい〳〵、わつしよい〳〵、わつしよ、わつしよ、わつしよ、——わつしよ……」。

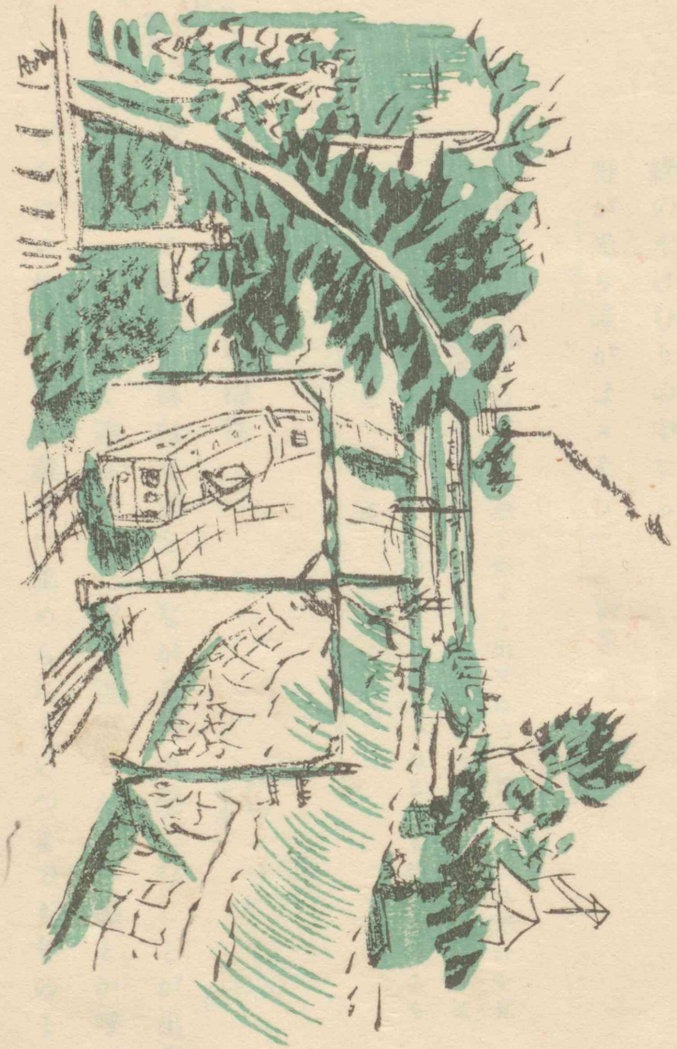
聲ある空はほんのりと、夢のやうな雲に灯を包んで動く。かやうな時、眷屬達三萬三千のお猿さんも遊ぶのらしい。

お猿さん　山王樣のお使だといはれるから、かういつたのである

「わつしよ、わつしよ。

わつしよ、わつしよ、——わつしよ、わつしよ……」。（愛府）

書いてある事がらのためもあるが、しかし、賑やかに華々しく出來た文章である。梅雨の頃のうつたうしさをよそにして、町の人々が思ふ存分に浮かれ出す、その樣子が手に取るやうに見える。しかも、その賑はひが夜の更けるまでも續き、はては遠くはやし聲が流れて行くといふ、そんなことまでも、皆殘るところなくあらはれてゐる。



（第八岩井水）外　郊

九　郊外

竹友藻風

竹友藻風
名は虎雄、大阪の人、詩人、明治二十五年生

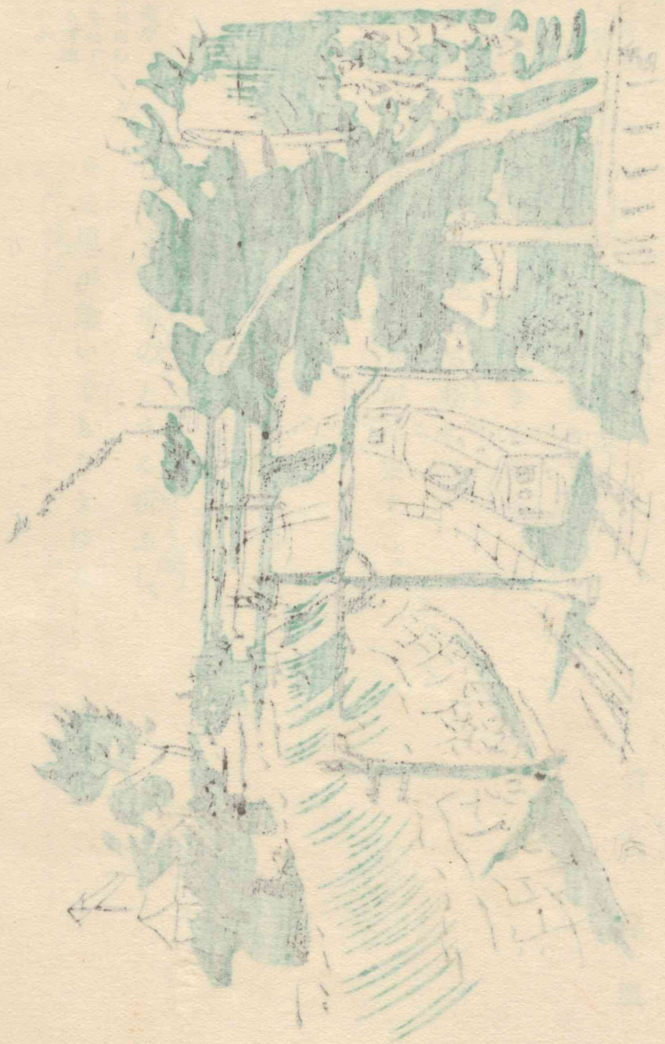
いらか
瓦屋根のこと

山の手電車
ほゞ東京市のまはりをめぐつてゐる省線電車をいふ

緑の丘と森の間から、
いらかの波はきらめき、
處々に見える街には、
魚のやうに人が往來する。

初夏のにほひは人の肌にも、
土にも池の水にもあふれ、
山の手電車のとまる折ふし、
そよ風が急いでもちまはる。

電車はまた走り出す、——



日本の都は次第に遠くなり、
緑の水けむりの中から、
野が光り森がほゝゑむ。（詩集）

初夏の東京郊外の明るい感じがよく出てゐる。言葉づかひだけを見ても、それに相應したやうな美しくさつぱりした意味のものが多く並べられてゐる。各齣の終をあつさりと結んでゐるのも、詩を力あるものにする上に役立つてゐる。

10 身邊涼味

相馬御風
名は昌治、新潟縣の人、文學者、明治十六年生

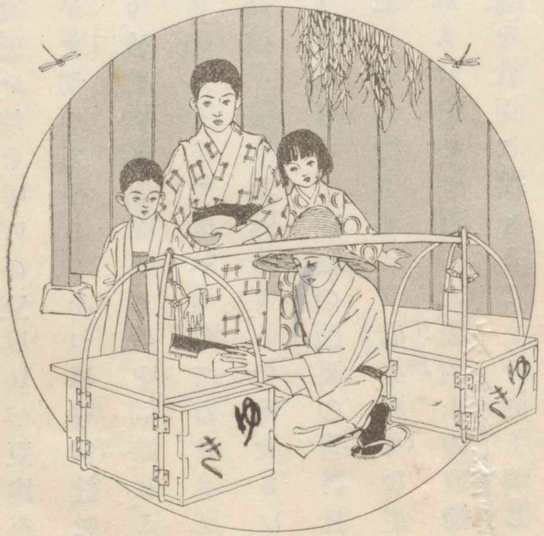
越後では、夏でも眞白な雪をゐながら眺め樂しむことが出來る。長い冬の間に降り積つた雪は、雪室とか雪小屋とか呼びならはされてゐる貯藏所に集められて、いつまでも冬のまゝ

の白さを失はずに貯へられる。それらの雪の大部分は、春・夏秋を通じて、生魚の貯藏に用ひられる。土地でとれた魚類を遠方へ移出するにも、やはりこの眞白な雪が何よりのたよりになつてゐる。まづ箱に一ぱい眞白な雪がつめられる。そして、その中にとれたばかりのいきいきした魚が埋められる。それはいかにも美しく、うまさうに見える。とりわけ鯛のやうな美しい色をした魚の雪漬にされたのは、見るから氣持のよいものである。眞夏になると、この眞白な雪の塊の驚くほど大きなのを、私達風情でも、さほど高い價を拂はずに、部屋の中に溶けるまゝにして置くことが出來る。それによつて、室内の空氣をどれほ

風御馬相

ど冷すことが出來るかは別として、單にそれを眺めてゐるだけにでも、他では得難い涼味がある。私達の幼い頃までは、この「圍ひ雪」を食べることが許されてゐた。そして、その頃は夏の街頭に雪賣の呼聲が絶えなかつた。

「雪や氷、雪や。」子供達は競うて、かうした呼聲を張上げて町中を歩いた。雪小屋へ行つて雪を買つて來る。そして、それを小さな箱や籠に入れて賣り歩く。買手があ



雪賣

る毎に、小さな鋸で眞白な雪の塊を、呼賣の豆腐屋が豆腐を切るやうに、小さくいくつかに切つてやる。それは子供達にとつては一種の仕事であり、商賣の練習であつたと同時に、この上なく愉快な銷夏法でもあるやうに考へられてゐた。

銷夏法　夏をしのぐ方法

雪は氷――殊に人造食用氷――に比べると、その冷たさはやはらかであり、齒ざはりも頗る快い。子供の頃、夏の暑い日盛りに眞白な雪の塊を手につかんで、ざく〳〵音を立てながら食べた快さは今でも忘れられない。しかし、衞生上の取締が嚴重になつてから、「圍ひ雪」を食用に供することが固く禁じられて、今日ではその代りに、私達の地方にさへも、夏になると何處からか人造氷が盛に移入されるやうになつた。そして、あの懷かしい「雪や氷、雪や。」といふ子供達の呼聲も聞くことが出

私達の地方　新潟縣西頸城郡糸魚川町附近をいふ

來なくなつた。

それにも拘らず、雪を貯藏して置く場所、卽ち雪小屋はつぎつぎに數を增して行く。それは魚類の移出が年々盛になつて行くからである。雪小屋は地面に大きな穴を掘り、その周圍に更に高い土手を築いて、その中へ冬季間雪を降りたまらせた上に、あちこちから集めて來た雪をかたく詰込み、その上を藁の屋根で蔽うて置くのである。この雪小屋の中に眞夏の日盛りに這入つて見るのにも、容易に得難い涼味がある。

これも近年見られなくなつたが、私達の幼い頃には、毎年夏になると、山中の村の人達が時々深山の溪間に殘つてゐる天然の氷を採つて、町に賣りに來た。その人達は妙な形の籠に、蔦や萱の葉を澤山入れ、その中にビードロのやうな氷の大きな

ビードロ　硝子の意、もと葡萄牙語 Vidro

破片をつゝむやうにしたのを背負つてゐた。私達はそれを買つて貰つて食べることに、一種特別の面白さをさへ感じてゐた。

「これは向ふに見える山の溪間にある氷を斧で割り採つて來たんださうだ。深山には、夏でもこんな氷が溪間にあるつてことだ！」こんな事をいひ合つて、私達は蔦の葉につゝんだ小さな氷の破片を不思議さうに眺め合つたりした。

しかし、今日ではもうそのやうにして、深山の氷をわざ〳〵採り出して來なくても濟むやうになつた。便利といへば便利であり、衞生的といへば衞生的であるが、何かしら以前に冬のまゝの白さをもつた雪の塊を食ひ、深山の溪間から採り出して來た天然の氷をがり〳〵齧つてゐた時のやうなうまみが、

人造氷からは味はへないやうな氣がする。

夏の花のうちで、私は第一に月見草を好む。月見草の咲く砂山には晝顏も咲く。眞夏の日光に照らされて、火のやうに熱くなつた砂原に咲いてゐる、あの淡紅色の花にはいひしれぬ淋しさがある。

畑の垣根につゝましく咲いてゐる白いさゝげの花も、私は好きだ。

黃色な蕊と紫の花瓣とのよく調和した茄子の花も、懷かしむに足る風情がある。

花夕顏は夢のやうな花だ。この花は鉢植にして、電燈の光で見るのにもふさはしい。

雜草の中に交つてしをらしげに咲いてゐる、あの瑠璃色をした露草の花も好ましい。或年の夏、能登の和倉の磯山かげに、この花の群り咲いてゐるのを見たのが、今も忘れがたいものの一つになつてゐる。

夏の夜の涼しさは、何といつても海邊が第一である。日が暮れかゝる頃からは、避暑客などの來てゐない、このあたりの砂濱でさへ賑やかになる。暗くなると、人々はあちらに一團こちらに一團といふ風に集つて、焚火をする。そして、その焚火で茶を煮る。老若男女がその周圍で茶を飲み話をする。それは多く漁師の妻女達や老人達や子供達である。沖には烏賊釣船の漁火が幾百となく竝んでゐる。海上の漁火、海濱の

原始的な
少しも人間の手の加はつてゐない樣な、大昔そのまゝを思はせるやうな

火焚と火漁

焚火、いづれにも原始的な趣がある。

「沖の船の火はみんなでいくつあるだらう。」焚火の周圍に集つた子供達の間から、時々こんな問が母親達に向つて發せられたりする。

さうかと思ふと、「あの中のどれがうちの父つあ達の火だらうなあ。」といふやうな、情味の籠つた、いかにも子供らしい疑問まで持出される。

暗い海の上には、空のほの白い銀河が夜の更けるにつれて鮮かさを増す。涼しい風が水のやうに流れる。穏かな低い波の音が、單調な中に限りない複雜さを藏してゐるやうに聞える。時には廣い砂濱の何處かで、冴えた聲の追分節が歌はれたりする。冷たい砂の上に仰向になつて、私達は夜の更けるのも知らずに、星空の神祕に魂を奪はれてゐることがしばしばである。身内の冷えすぎたのに驚いて起きあがる頃には、磯の焚火もいつの間にか消えてしまつてゐる。そして、波の音が妙に淋しさをそゝる。沖の漁火だけは依然として燃えつゞけてゐるが、それさへも何となく淋しさうに見えるのである。（第二の自然）

前田夕暮
名は洋三、神奈川縣の人、歌人、明治十六年生

昔の思出と今の所見とを程よくつきまぜて、まとめあげたこの文章は全く子供にも大人にも懷かしいものである。殊に出てゐる場所が主として越後の海岸地方であるから、涼しい上にも涼しい感じを起させる。沖の漁火や濱の焚火のことなどもたゞ大まかに書き流してあるが、そこにまたなかなか得がたい妙味が出てゐる。

二　旅人と犬

向ふの原つぱの上の空を、灰色の塗料のやうな雲がひた押しに東から西へ流れてゐた。風もない、どんよりとした大氣の澱んでゐる夕なのに、空には氣壓の變動があると見えて、その雲の流れ行く樣は、空を押し傾けて大地をも曳きずつて行くほどである。

鈍い低音でありながら、幅の廣い、土に籠つた無氣味などろど

ろといふやうな音響が原つぱの向ふから地に傳はつて來る。

まるで地の底で唐臼を挽いてゐるやうな、どろ〳〵といふ言葉のあらはす音響そのまゝの、重く濁つた氣分が庭に立つてゐる私の足の爪先から頭の方へ來る。

「福さん、あの音は何だらう。」

と、私は作男に訊いた。庭を掃いてゐた福藏は、

「あれは土用波です。海が荒れてゐるのですぜ。」

と、ふと立止まつて、原つぱの方を見て教へてくれた。

庭の片隅に生えてゐる草の葉が細かくふるへてゐるやうだ。

「福さん、草の葉つ葉がふるへてゐるよ。」

「どうら、どの草の葉が……。」

「これだよ。みんなふるへてゐるではないか。」

「坊ちやんの氣のせゐだ。私には分らないですよ。」

「これが分らんのかなあ。そら、みんな草の葉の先がふるへてゐるよ。」

「さうかね。草もあの土用波の音を聞くと無氣味なんでせうかね。」

前田夕暮

「さうだよ、かうやつて立つてゐると、地の底の方からどろ〳〵つていつて來るだらう。何だか體のしんの方に響いて、足や手がふるへるやうだもの。」

といひながら、私は狗ころ草の汗ばんだ葉をぢつと見た。すると、福さんは竹箒を持つたまゝ庭の眞中に突立つて、

「坊ちやん、變な奴が來ましたよ。」

狗ころ草　一年生の草本で、夏に淡綠色の花をつける、いぬこぐさともいふ

私はさういはれたので、ふと門口の方を見ると、痩せさらぼへた一匹の汚れた毛並の白犬を連れて蓬のやうな髪の、體のよぢれて見える男が、海草でも着てゐるやうに縞目も分らぬ襤褸をひきずつて、ふら〳〵と庭に這入つて來た。私は福藏のうしろに隠れて、そつとその乞食の方を見た。

「おまへは何だ」

と、福藏は叱りつけた。

旅人は底光りのする——それは暗い夜の海のやうな眼を正面に見据ゑて、手を前にさし出して一つお辭儀をした。その手の指は蟹のやうに思はれた。

「おまへは乞食か。乞食にしてはついぞ見かけない乞食だが、何か藝が出來るか」

と、福藏は睨みつけるやうにして立ちはだかつた。

乞食はたゞお辭儀を一つした。

「藝があるなら、何かやつてみな。……さうしたら握飯の一つもやるまいものでもない」

乞食は福藏の顏を覗き込むやうにして、ちよつと考へてゐた。

白い犬は首を長く前に投げ出して、涎で汚れた春の雪の消え殘つたのかのやうに地に匍匐してゐた。この犬の顏は老をあらはしてゐた。家畜といふよりは人間に近い貌をしてゐた。たゞ眼だけは赤かつた。その赤い眼をとろりとさせて、私の顏を映してゐるやうに見えた。

空一面に流れて行く厚い雲の層は夕日の光を含んで、上から押しつけるやうに見えてゐた。地上の草木には、もう暗い影

匍匐して
はらばつて

つてゐた。
がまとつてゐた。
そこへ、土間の方から父が歩いて來た。
「どうしたんだ」。
「いゝえ、見馴れない奴が來て、默つてそこに突つ立つてゐるので御座います。」
「さうか。なるほど見馴れない爺さんだが、狂人でもなさゝうだ。何か物をいはないのか」。
「えゝ、さつきから何をいつても默つてゐるので御座います。旦那様、此奴はことによると、もうひもじくて物がいへないのかも知れないと、私は思ひますがね。何か食べるものをおやりになつたら、どうで御座いませう」。
「さうか。なるほどな、えらく疲れてゐるらしいなあ。その

白い犬はやつぱり爺さんが連れて來たのだな」。
「さやうで御座います」。
といひながら、福藏は土間へ這入つて行つた。臺所の方で、母に何か大きな聲で物をいつてゐるのが聞えた。
私は父のそばに寄つて、ぢつとこの無氣味な珍客を見守つた。この乞食は先刻庭に這入つて來た時には、まだそれほど年はとつてゐるやうに見えなかつた。頭の髪が秋ぐちの草山のやうに長く亂れ、たゞ眼だけが光つてゐたので、私はすつかり氣を擊たれてしまつて、それが老人であるかないかといふやうな見わけはつかなかつたのであつた。が、今父がはじめて爺さんといふ言葉をもつて呼びかけたので、もう一度見直したのであつた。この間來た巡禮の爺さんとは、すつかり型の

違つた人間であつた。見やうによつては老人にも見えるし、その眼だけを見てゐると、年齢などは超越した自然――暗い夜の海のやうな物すごさがある。

「おまへは何處から來た。」

冒頭語 最初にいひ出す言葉

これは放浪者が訪ねて來た時に、父がいつもいふ冒頭語である。その父の言葉が分つたのかどうか知らないが、不思議な旅人は長い手を延ばして、うしろを振返つて土用波の地響してゐる原つぱの方を指さした。そして、何もいはうとはしなかつた。海鳴りのしてゐる方向を指さした時に、大きく光つた眼が正面に向き直つたが、それはどんよりとした夕の色を映してゐた。

そこへ、福藏が皿に大きな握飯を盛つて運んで來て、旅人の方

にその皿をつきつけるやうにした。すると、旅人は默つて福藏の手から皿を受取つて、崩れるやうに土のうへに坐つてしまつた。そして、白い握飯一つを取つて犬に與へた。犬は物憂げに首を擧げたが、香を嗅いだばかりで、食べようとはしなかつた。

旅人は土に坐つたまゝ、皿の上の握飯を碌々嚙まず

旅人は默つて皿を受取つた

に食べた。そして、それを呑込む時、ぐびり〳〵と喉が鳴つて、波のうねりのやうにふくらむのを私は見てゐた。食べてしまふと、皿を傍の土の上においてぴつそりと靜まりかへつて、眼を閉ぢてしまつた。長い海草のやうな髪の毛が顔から肩の方に亂れて垂れかゝつてゐた。

「此奴もこの間の巡禮の爺と同じに、弘法山におあげになるので御座いますか。」

と、福藏は父の方へ向つて少し不平らしくいつた。

「仕方があるまいなあ。これもやつぱり行路病者として、山にあげずばなるまいて。……それはさうと、今山には何人ゐたかな。」

「さやうで御座います。この間の爺さんと、紀州者だといふ

弘法山　神奈川縣秦野の近くにある山、作者はこの邊の出身である

行路病者　身元のよく分らぬ道中での病人

六部の婆さんと、盲の旅藝人と、それからずつと前からゐる鐘つき名人の爺さんと、四人で御座います。さう〳〵、まだ一人をりました。あのよい〳〵の物貰ひの吃がゐる。都合五人で御座います。」

「さうすると、この爺さんを入れて六人だな。いゝだらう、それぐらゐはあの庵室に寢られるだらうからなあ。」

「えゝ、寢られるどころでは御座いません。何しろ十五疊も敷ける座敷ですから。それでは此奴も山へ連れて行きませうか。」

「さうだ。おまへ御苦勞だが、夕飯を食べたら、連れて行つて貰ひたいものだ。」

もうとつぷりと庭は暮れてゐた。旅人の爺さんの影は、土間

よい〳〵　手足のしびれて自由にならぬ病氣

を透して來るランプの光に、かすかに霧んで見られた、犬だけはぼうつと白く闇の底に暮れ殘つてゐた。土用波は日が暮れると一きは地に籠つて、ど、ど、と高く響いてゐた。（烟れる田園）

人物がそれ〳〵よく描かれてゐる。夕闇に白くぼうつと見える犬もよく出てゐる。そして、それらを一まとまりとして、庭さきに起つた小さな出來事をあらはして行く筆はなか〳〵行屆いて、手落がない。對話の文も手短に要を得てゐる。

三　熱海から東京へ

風波が靜まつて、やがて好い日和を迎へた。最早秋が立つといふ前の日である。東京の留守宅のことも何となく心に掛

島崎藤村
名は春樹、長野縣の人、文學者、明治五年生

靈岸島
東京市京橋區

伊東
靜岡縣、熱海の南

末子
作者の娘のこと

つて來た。私の歸京が遲れたので、留守してゐる人達もさぞ待ちわびてゐるだらう。海もよい風だ。宿の女中が來ての話によると、その日の靈岸島行の船が伊東から廻つて來るかどうかは、午後になつて見なければ分らないさうである。しかし、こんなよい日に出掛けられなかつたら、いつ出掛ける時があらうかといひたいぐらゐだつた。

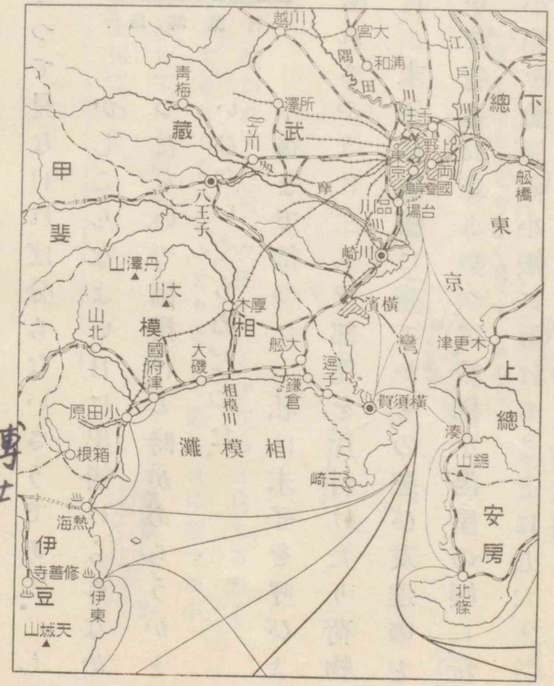
島崎藤村

午後まで待つた。私は末子を呼びよせて、いつでも出られるやうに、二人で部屋を片付けたり荷物をまとめたりした。末子は熱海に來てからの遊び友達のところへも何か置いて行きたいといつて、横櫛を湯屋の娘に、玩具のおはじきと小箱を魚屋の小娘にあげることにした。

「置土産にろくなものはないね。」

私は思はず娘の傍で噴き出してしまつた。

午後の四時頃まで待つた。伊東から來る船のあることが漸くその時に確められた。私達がドクトル（博士 Doctor）やKさんと一緒に、汽船の發着所を指して出掛けた頃は、そろ〳〵黄昏時に近かつた。艀（はしけ）まで見送らうといつてくれた親しい人



達をはじめ、私の宿の帳場・番頭などは、淡い夕月のある砂の路を、防波堤づたひに私達と一緒に歩いた。

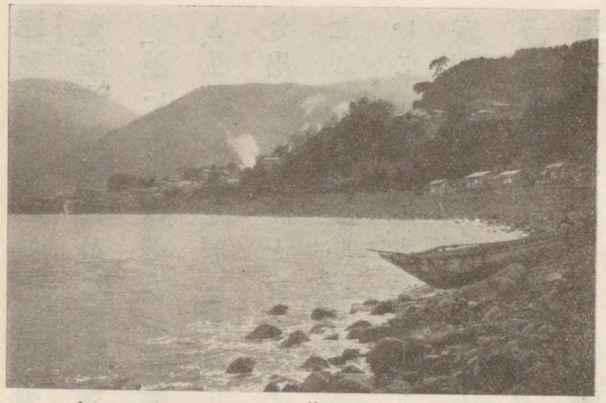
「熱い海とはどういふ意味でせう」。

と、私が歩きながら尋ねた時に、今の間歇泉が昔は海中から湧き出してゐたといふこと、海潮そのものが時には熱湯であつたこと、今見る防波堤でも何でも、往時の海岸の面影を殘さないことなどを、私に話してくれたのは宿の帳場であつた。

定刻の六時に横磯に着くといふ汽船は、なか〳〵やつて來さうもなかつた。熱海もその横磯のあたりには漁村の感じが殘つてゐて、何となく野趣がある。恐らくその邊も往時のまの横磯ではないのだらう。艀を出す船頭の住居かと見えて、汽船の待合所の前あたりには、あか〳〵と焚火をしたのが

野趣（ゐなかびたおもむき）

洩れる家もある。海からあげて來たばかりのやうな魚を籠に入れて、聲を掛けながら通るやうな隱居もある。餘り汽船が遲れるので、待合所に客をもてなしてゐたおかみさんは古い雙眼鏡を取出した。小屋から海の見える處へ行つて、頻りにその雙眼鏡で伊東の方角を望んだ。

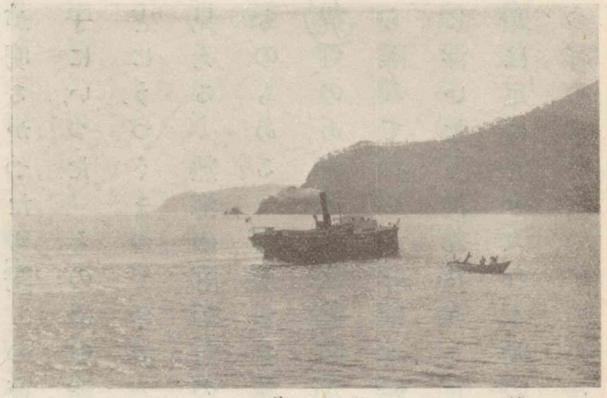


海上からの

「まあえらい遲れる。」

と、おかみさんは雙眼鏡を手にしていつた。

「どれ私に一つ貸して見せて下さい。」



見た熱海

といひ出す客もあつた。私達も待ちあぐんで、かはるゞ〳〵それを借りて見た。暮れて行く海、暗い岬の鼻などは映つても、汽船の燈火らしいものは私達の眼に入らなかつた。船の切符の賣場では、夜航の客の住所・姓名・職業・年齢などを尋ねられた。私は連に代つて一々答へた。年齢は、ドクトル三十二、Kさん二十九、末子十五、私が五十三だ。

七時になつてもまだ船の來ない待遠しさに、私は待合所の附

近をあちこちと歩いて見た。そこらはもうすつかり薄暗くなつて、六日ばかりの夏の月が空にあつた。これでもつと月が明るかつたら、歸りの夜航はどんなに樂しからうと、私は末子にいつた。その邊の陸に引揚げてある傳馬や堤防の側などにうづくまつて、今か〳〵と船を待ち受けてゐる客の影も見える。熱海の町の灯の見える方へ、海岸を歩き廻りに行くものもある。たうとう私達は夜の八時まで待つた。

提灯のあかりで、私達四人は艀に移つた。客を滿載して岸から離れて行つた艀は本船の側に横づけになつたまゝ、波と共に浮いたり沈んだりした。それほど動搖が激しかつた。船頭は足に力を入れ、本船の梯子と艀の間に跨つてゐて、一人づつ客の手を取つて引揚げた。ドクトル・Kさん・末子、最後に私

はどつと來る波によろめきながら、急いで本船に上つた。私達が今度乘つて見た汽船はかなり大きく、伊東と國府津の間を往復する定期船とは比較にもならないほど新しくて、しかも整つてゐた。廣い船室には大勢の先着の客があつて、いづれもこの夜航に寢て行かうとする人ばかりだつた。私の連は三人とも、船室に入るとすぐ横になる支度をした。船の動き出した後、私は獨りで甲板に出て、もう一度岸の方を望まうとした。上弦ながらに空にある月の光が、薄くぼんやりと甲板の上にあたつてゐた。

私が甲板から船室へ引返して行つて見た頃は、連はいづれもそこに備へつけてある「生命の袋」などを枕がはりにして、横になつてゐた。まだ八時を過ぎたばかりの宵の口に、みんなこ

んなに横になつてしまつて、船に慣れない人達ほど本意ないものはないと思つた。そのうちに船酔の人が出來て、その介抱に忙しかつた。私は食堂の方から茶を捜して來て、好きな煙草をふかしたり、乾いた喉を霑したりしながら、みんなの傍にぼんやりと起きてゐた。船に弱い人達を見廻りに來る船員の中には、寶丹を置いて行つてくれるものもあつた。私はそれを連の人々に分けてやつた。

私は深夜に獨りで甲板に出て見た。その時の私は、寢苦しい窮屈な船室で、何程の時の間をうとうとしてゐたかといつて見ることも出來なかつた。私の乘つてゐる汽船が海のどの邊を進みつゝあるのか、それさへよく分らなかつた。少くとも、船體の動搖が身に傳はることが弱くなつた點から推して

張合ない

見て、最早荒い相模灘を通り越したのだとは思つた。青い美しい燈臺の光が私の眼に映つた。私は船で貸す毛布に深く身を包みながら、暫く甲板の欄に倚りかゝつて、恰も暗い海の奥に光を放つ一點の星のやうなその姿を見守りながら立つてゐた。やがてその青い光が段々後方になり遠くなつて、しまひには隱れて見えなくなる頃に、また船室の方へ引返した。そして、無理にも寢て行かうとした。連の人達はと見ると、一時の激しい船酔も鎭まつて、みんなよく寢靜まつたやうではあるが、その實、私と同じやうに眠りにくいと見えて、かはるがはる眼を覺してゐた。私の周圍には、ほんとに眠つてゐるものは一人もないかに見えた。

いつそ甲板の上で夜明を待たう。その考からまた船室を出

恰

て見た頃は、やがて月も入つてゐた。船は私達を載せたまゝ、東京灣の入口あたりかと思はれる波の上に錨をおろして、ぢつと動かずに空の白むのを待つてゐた。私の好きな夜明前の靜けさは周圍を支配してゐた。力が、即ち曙近くなつて甦へつて來るやうな力が、その時の私の身にしみ〴〵と感じられた。もうねむくもなかつた。

そのうちに、ドクトルが甲板の上へ私を捜しに來た。Kさんや末子も起きて來て、船の毛布にくるまりながら、周圍を見廻してゐた。そこはかうした定期船の甲板として見ても、かなりに廣い。いくつかの長い腰掛には、私達と同じやうに夜明を待つ人達も見えて來た。

「高橋、――おい、起きんか。」

傍輩
仲間、友達

「寺島も起きろ。」

こんな聲が私達にも聞えた。薄暗い甲板の片隅には、そこへ來て夏の夜を寢惜しんでゐるやうな船員も多かつた。傍輩に呼び起されたものはいづれも蒲團を抱へて、すご〳〵と甲板を離れて行つた。

「交代の時間が來たんだね。」

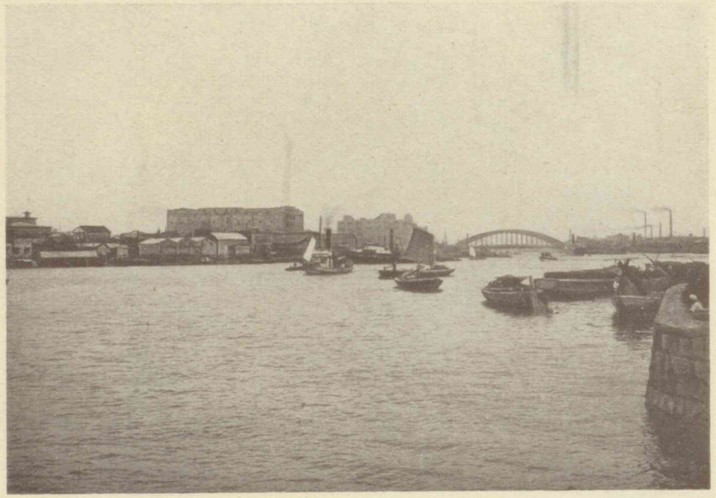
と、私は末子にその人達の方を指さして見せた。空も暗く、海も暗かつたが、水の上に瞬きするやうな灯の影で、あそこにもこゝにも碇泊する船があると、それを末子に指さして見せることは出來た。何もかもひつそりと鎭まり返つてゐた。私と末子とは互に近くゐて、めい〳〵毛布にくるまつてゐても、まだ寒くてぞく〳〵する程であつた。

やがて東の方の遠い空の一部がかすかに明るくなつて來た。

まだ寒くてぞくぞくする

私達の船では、錨を卷き揚げる音がしたかと思ふと、それまで靜止してゐた位置から離れて、また徐徐に動いて行つた。薄暗い水の上には、まだ殘つた夢を見てゐる船があり、漸く眠から覺めたやうに動き出す船もあつた。

遠く灣頭を望むやうな光景が次第に私達の眼前に展開した。私達は右を見、左を見して、無數の灯を望んで行つた　私達の船は甲板から見あげるやうな黑い



隅田川口

ゆつたりとした流には船べりのペンキが匂ひ、明けはなれた空にはゆるやかに汽笛でも響き渡りさう。煙突・倉庫・鐵橋。こゝにも帝都の偉大な姿が見える。

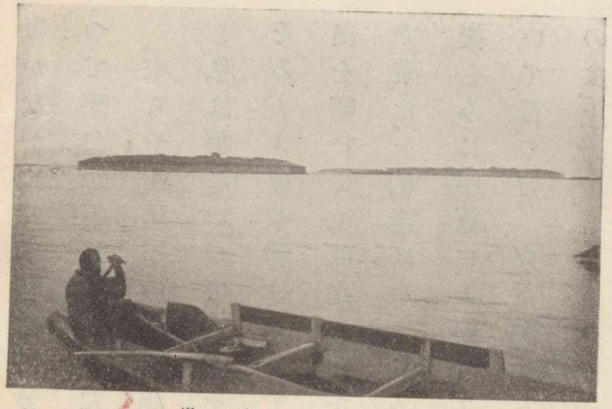
ものゝ傍をも通り過ぎた。その黑い影は巨大な巖のやうに動かなかつた。私は自分の乘つてゐる船がそんな處まで歸つて來たかと、氣がついた時に驚いた。

「末ちやん、品川のお臺場だよ」。

と、私は娘にいつてそこを指さした。

そろ〳〵夜も明け初めて來た。その早い朝は甲板から日の出を望むことは出來なかつたが、いつ白むともなく空が白んで來た。私達はかはる〴〵船室へおりて行き、また朝景色を樂しみに甲板にあがつて見たが、船は段々靈岸島の方へ近づいて行つた。東京灣から隅田川の河口を通つて東京に入るのは、上野から入り、兩國・千住から入り、東京驛から入るにも勝つて、一番大都會の入口に來たらしい感じを與へた。何を見

ても眼が覺めるやうで、小さな旅の終らしい氣のしたのもその朝だつた。



品川の臺場

靈岸島まで歸つて來た。そして、いよ〳〵上陸した時には、私達は思はず顏を見合せた。さういふ四人とも、まだ顏も洗つてゐなかつた。私は汐風に吹かれて來た快さを抱いて、みんなと一緒にぽつぽつ家の方へ歸りかけたが、そこらにはまだ戸を締めて寢てゐる家も多かつた。（嵐）

別にさう變つたことを書いてゐるわけでもないが、すべてがきまりよく整つて、人物もその周圍のことも念入りに描かれてゐる。船を待つてゐるところ、船で夜明前の靜けさを味はふところ、隅田川の河口に近づいて行くところなど、いづれにも皆すぐれた筆の力が見える。

加藤介春
名は壽太郎、福岡縣の人、詩人、明治十八年生

三　風

加藤介春

風は大きなあたまをした圓い坊主だ。
風は手もなく足もない胴ばかりのやうな生きもので、
象のやうにのろ〳〵と歩いてゐるが、
すばやい奴で、
葦の葉の二三本茂つた中にも隱れ、
淺い水の上にも消えうせる。
それは皆草や木にあやかるのだ。

風はよくとぼけたり、
悪戯をしたりする。
それは人間にあやかるのだ。

見給へ、さつき水の底に隠れた風だが、
すぐにまた向ふの土手に現れ、
大きなあたまを持ちあげる。
そして、何だか笑つてゐる。　（日本詩集）

譬が思ひきつて變つてゐるので、讀む人を心から喜ばせずにはおかぬ詩である。自由な言葉づかひのうちに、怪物のやうな、しかし、親しみを持ち得る「風」といふへうきんものが躍り出してゐる。

田山花袋
名は錄彌、群馬縣の人、文學者、明治四年生

一四　松花江のほとり

松花江の河岸に立つた時には、私はほつと息をついたやうな氣がした。それは飽くまで滿洲の河であつて、內地の大河とは趣が全く違つてゐるにはゐたけれども、その溶々と兩岸を浸すばかりに流れてゐる樣は、私の心を樂しませずには置かなかつた。私はそこに青い白い赤いボート（boat）が、或は岸に繫がれ、或は水上に漕がれてゐるのを目にした。ジャンク（junk）の帆柱の林立してゐるのをも目にした。下流遠く下つて行く五六百噸の汽船が、一二隻埠頭に横附にされて、煙突から黑い煙を吐いてゐるのをも目にした。更に上流の鐵橋の向ふに、砂洲に膠したやうに、空しく岸に繫がれてゐる二三隻の汽船をも目にした。

ジャンク
支那にある民船の一種、戎克と書く

膠したやうに
こびりついたやうに

人の話では、この河の航海權を占めることが出來なくなつたので、汽船はあつても日本の名では航行することが出來ず、それで、そこに空しく横たへてあるのだとのことであつた。

私は日本と支那と露西亞(Russia)とが、どのやうな關係にあるがよいかを考へずにはゐられなかつた。そして、私のやうなものでも、是非とも日本は十分にこゝに地歩を占めることが必要だと感じた。

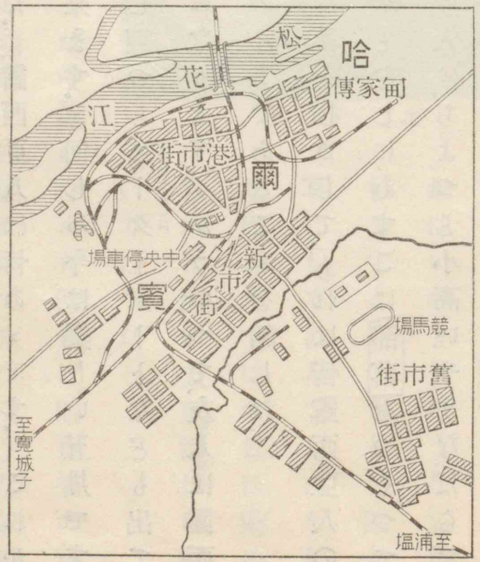
袋花山田

見たまゝの松花江は、利根川の河口あたりとその幅を等しうしてゐた。しかも、全體の感じは利根川よりは寧ろ信濃川の下流に近い點があつた。私はぢつと立ちつくした。

哈爾賓(ハルビン)(Kharbin)にゐた間に、私は少くとも三度はその河の岸に立つた。

それほど私はこの河にあこがれてゐた。舊知の人と一緒にその岸に立つた時には、對岸まで渡つて見なければ、ほんたうにこの河の感じを味はふことは出來ないと思つて、繫いであるボートを支那人にあやつらせて濶い河の上へと靜に漕ぎ出て行つた。

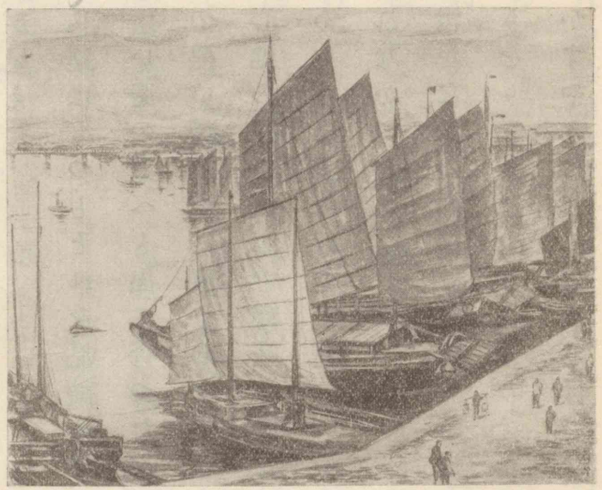
私は何かしら歐羅巴(Europe)の都市にある河にでも來たやうな氣がした。露西亞の女達は輕快な服裝で、或は赤い帽子を或は白い上衣を美しく見せつゝ、燕のやうに輕く



オールを動かして行つた。「露西亞人は皆あゝです。これから、あゝして皆河に出て來ます。何しろ今は樂しい五月ですからなあ。いや、もう少し經つと、モーターボート(Motor boat)なども出て來て、河は非常に賑やかになります。」かういつて、友人は露西亞人が比較的無邪氣でのんきであることを話した。

友人はつゞいて向岸の部落を指さして、「あれは皆露西亞人の家です。皆あゝして、いつとなしにあすこに部落をつくつてしまつたんです。露西亞人は、ちよつと小高いやうな、だらだらと河の岸におりて來るといふやうな處が大好きですからなあ。私はよくあそこいらを散歩しますが、外見はどんなに汚い乞食小屋のやうな家屋でも、中に這入ると、ちよつと小綺麗にしてゐますからなあ。花を野から採つて來て瓶にさし

たり、汚い部屋に白い窓掛をかけたりしてゐますからなあ。それを思ふと、一種の哀愁を誘はれますよ、かはいさうなやうな氣がしますよ。」かうした話を耳にしてゐるうちにも、私達のボートは夕日に染められた河の上を滑かに動いて行つた。



江花松

次第に兩岸に遠く、ボートが中流に浮んだ時には、哈爾賓の市街が更にはつきりと私の頭の中に描かれて來たやうな氣が

した。ちやうどその時、彎形をした大きな鐵橋には、長蛇のやうな汽車が轟然たる音をあたりに響かせつゝ通つて行くのが見えた。

私達はぢつとそれを見詰めた。汽車は時の間に橋を過ぎて、廣い野の方へと出て行つたが、暫く經つた後にも、なほ遠くその黑い煙が空に靡くのを指さすことが出來た。私はあの乘心地の好い汽車の寢臺に横たはつて、遠く何處までも、莫斯科(モスクヴァ)Moskvaあたりまでも行つて見たいやうな心持を誘はれずにはゐられなかつた。

滑かな水の面には、午後六時過の日が明るく美しくさして、をりをり大きなつぎはぎのジャンクの帆が、私達のボートを蕩(うご)かすやうにして掠めて行つた。そして、その帆の下には、支那

人の船頭が二三人かたまつて、何か頻りに話してゐた。一人の船頭の横顏を、夕日が思ひきつて赤く染めてゐた。

向ふの岸に近く、楊(やなぎ)のひくい若樹の綠に沿うて、やがてそこに私達はボートを捨てた。ちよつとした丘の上ではあつたけれども、その上に立つてあたりを眺めた時には、思はず歡聲を揚げずにはゐられなかつた。何といふ廣さだらう。また何といふ荒漠とした光景だらう。何でも支那側では、そこに、その鐵橋に接した處に、新に彼等の市街を建てることを計畫してゐるといふことではあつたけれども、さうしたことはいつ實現されるかと思ふほど、そんなにあたりは荒漠としてゐた。草は茫々として、異鄕の思を私に誘つた。

「こゝらはもう少し經つと、露西亞人でいつぱいになるんです。」

全く彼等ほどピクニック(Picnic)の好きな人間はありませんからなあ。あの楊の緑の中にサモアル(Samovar)を持つて行つたりして、樂しさうにしてゐますからなあ。あゝいふところを見ると、どんなにおちぶれても、大國民といふやうな氣がしますよ。友人はあたりを指さしつゝ、こんなことをいつた。

ピクニック 遠足
サモアル 湯わかし

露西亞避難民の住んでゐるといふ河に沿うた村を、私達は裏から覗くやうにして通つて行つた。そこで私はいろ〳〵のものを見た。支那人の汚い家屋といくらも違はないやうな掘立小屋をも、豚のごろ〳〵轉がつてぐう〳〵いつてゐる汚い小屋をも見た。さうかと思ふと、夏の暑さを避けるためのヴェランダ(Veranda)のやうなものが長く河に臨んでつくられてあるのをも見た。避難民の中にも、やはりブルジョア(Bourgeois)が雜つて住

ブルジョア こゝでは立派な生活が出來るほどの人をいふ

んでゐるのであつた。或處では、見るも恐ろしい大きな犬に凄じく吠えつかれて、あわてゝ逃げ出した。

「露西亞人の村落は、何處まで行つてもみんなかういふ風ですよ。これで內部はなか〳〵綺麗にして住んでゐます」。村の眞中あたりから河岸の方へ下りながら、友人はかう私に話して聞かせた。

河では、夕日が既に光が薄れてゐた。それにも拘らず、これからボートを浮べようとしてゐる、二三の露西亞人の娘などがあつた。水の面にも、オールで水を打たせた、さうしたボートが燕のやうに行つたり來たりしてゐた。

ボートを此方へ漕ぎ戻して來る間、私達は默つて相對してゐた。誰にも、かうした異鄕にゐるさびしさが脈々として胸に

上つて來るらしかつた。のんきで刺戟がなくつて好いなどといつてはゐるけれどもやはり心は遠く內地にあるらしかつた。夕日の影はいつか消えて、蒼茫たる夜氣が靜に水の上に漂ひ渡つた。溶々として流れて止まぬ大河の流といふ感じが、たゞ私達の胸を塞ぐやうに湧いて來た。（海をこえて）

ゆつたりと落付きはらつてゐる書ぎぶりといふことが、まづ眼につく。それは敍景を手堅く正直にして行つてゐるからであるが、なほそのうちに、あつさりと時々の心持を書き添へてゐるので、殊にゆかしい趣のある文章になつてゐる。

矢田挿雲
名は義勝、神奈川縣の人、文學者、明治十五年生
弘治元年（一三五）小牧山今、愛知縣のうち

一五　初鷹狩

弘治元年一月七日に、信長は小牧山に向つて初鷹狩を試みた。

前の日から吹き出した北風が一層募つて、その朝は粉雪さへまじつた。

一たい信長の鷹狩は一種特別の陣立であつた。二人づつ一組になつてゐる鳥見の衆が順々に十組ほど、闇を衝いて先發した。馬術指南の山口太郎兵衛はそれと前後して鞭を擧げた。その後から、狩裝束をした信長が、池田信輝・前田犬千代等六人衆と名づけられた面々を從へて繰出した。

矢田挿雲

横なぐりに吹く風につれて、雪はまた一しきり烈しく降つた。六人衆の後に從ふ鷹匠や勢子はどうかすると信長の姿を見失ひさうであつた。信長は一度も後を振向かずに、馬を飛ば

足掻　もと前足で地を掻くことから出て、歩く時の足の運びをいふ

清須城　信長の居城、清洲とも書く

した。雪が小やみとなれば馬の足掻を早めた。その時は信長も馬も喜び勇んだ。どうかすると、血氣の近習達でさへ遙におくれることがあつた。信長は前後左右に一人の家來がゐなくなつても、平氣で馬を進めた。そして、折々鼻唄を歌つてゐた。物騷な戰亂の世に、彼はいつでもおのれ一人で鼻唄を歌ひながら、何處へでも行くといふ元氣であつた。

清須城から一里半ほど來たと覺しいあたりから、狩場が布かれてあつた。やつと追ひついた鷹匠は緋房の附いたお鷹を信長に捧げた。信長はそれを受取つて、左の拳に据ゑた。氣に入りのお鷹は一度羽ばたきをして、輕く瞼を閉ぢ、今度開いたと思ふと、鋭い光で信長を見た。信長もまた鋭い光でお鷹

の眼を見た。それが信長とお鷹との挨拶であつた。

ほのぐと夜が明ける頃、風は凪いで雪も間遠になつた。山の端から昇つた太陽は雲の絶間に時々その姿を見せた。三百人ばかりの勢子は二隊に別れ、一隊は鳥見の衆の背後を鍋の弦のやうに卷き、一隊は信長を要として、左右へ扇のやうに廣がつた。別に百姓に化けた向待の衆が五六人、手拭で頰冠をして、何もない刈田の中に立つて鍬を振上げてゐた。

織田信長

山口太郎兵衛は十組の鳥見の衆を檢閲して戻つて來た。馬

上に頭をさげて、

「お早う御座ります。お鷹の機嫌はいかゞで御座りまする」。

「鷹めは上々吉ぢや。手配は宜しいか」。

「宜しう御座ります。おつつけ鶴を追ひ出して御覧に入れまする」。

「そちの鶴はいつも脚の短い鶴でのう」

と、信長はからかつた。太郎兵衛は、

「恐入りました。脚の長い鶴を御所望でゐられまするなら――」。

と、謹厳な調子でとぼけた。

「あつはつは、、、脚の寸法は後に測ればよい。――早う致せ」。

「畏りました」。

鷹なぶり　鷹の羽をつくろひ、または鷹をなぶつて腕付かせぬために用ひる鞭で、一に鷹わ鞭ともいふ

太郎兵衛は馬に一鞭あて、馳せ去つた。

鳥見の衆も勢子も鳴りを鎮めて、朝鳥の渡るのを待つた。からだ中を目と耳にして、八方へ氣を配つた。信長ももはや鼻唄を歌ふことをやめて、鳥見の衆の注進を今か〳〵と待つた。

お鷹は前の夜、夜どほし鷹なぶりを食つて、一睡もさせられなかつたいらだたしさから、太陽を貫くやうな強い目つきで空を見上げてゐた。向待の衆だけが間のぬけた調子で空田を耕してゐた。

鎭守の森かげの池から、二三十羽の鴨が勢子に追ひ出された。そのあたりを見張つてゐた一組の鳥見のうち、一人は馬を飛ばして信長にかうと注進した。殘る一人は鴨の行衛を見張つてゐた。山口太郎兵衛は鳥のまはりを乘り廻しつゝ、お鷹

の方へ追ひ立てた。勢子も遠巻に、ほう〳〵とおどしの聲を揚げて、鳥の逃げ路を遮つた。

頃を見て、信長はお鷹を放つた。お鷹は霜の滿ちた空に鈴を鳴らしながら、眞一文字に舞ひあがつた。

算を亂して　ばら〳〵になつて

お鷹の羽風を聞いた鴨の群は算を亂して八方に逃げ散つた。もと來た森へ引返すのもあれば、礫のやうに地上に落ちて、そのまゝ枯薄の叢に隱れるのもあつた。犬飼は先程から小笹の中に潛んで鷹犬の綱を握つてゐたが、時分はよしと綱を放ち、鴨に向つて犬を追つた。鷹犬はまつしぐらに叢を目がけて突進した。空には鷹、地には犬、この二つの狩り手の目をくらまして逃げおほせることは、いはゆるぬすたつ鳥の最も苦心を要するところであつた。

ぬすたつ　そつと逃げ出す

狩杖　鷹狩に鳥を追つたり犬をいましめたりするに用ひる杖

勢子繩　勢子が鳥獸を追ひ出すのに用ひる繩

周圍の勢子は狩杖をあげ、勢子繩を打振りつゝ、盛に鳥叫びの聲を浴びせては鳥の膽を寒からせた。お鷹はその強い羽根を一搏して一の鳥をよろめかし、二搏して二の鳥を氣絶させた。二羽の鴨が刈田に落ちるや否や、向待の衆が飛んで行つて難なく押へつけた。

お鷹は鈴を鳴らしつゝ、信長の拳に歸つた。鷹犬は遂にぬすたつ鳥を逸した。しかし、彼は畦の上にしやがんで、風は何處吹くといふやうな顏をした。その顏はまた人事を盡して天命を待つ、我に於て憾みなしと悟つてゐるやうに見えた。

鳥見の衆からは次々と注進が來た。信長はその都度少しづつ本陣を進めた。獲物は大概鴨であつたが、その中に雉も二羽ばかりまじつてゐた。はじめ鷹犬が頻りに小川の邊で吠

えた。近習の一人が出て追ひ立てると、一羽の雉が色羽を輝かしながら、低い空をゆらり〳〵と優長に飛んだ。信長はすぐにお鷹を放つた。お鷹は雉の行手を圓く廻りながら、疾風のやうに飛びついて、劍のやうな嘴で雉の喉を突いた。雉は色羽を更に血に染めて、千代紙のやうにひら〳〵と舞ひ落ちた。すると、鷹犬が駈け寄つて前足で雉の背中を押へ、遙に信長の顔を仰ぎ見た。

「ういやつ。」

と信長が褒めたので、鷹犬は雉の翼をくはへて信長の前に持つて行つた。犬千代がそれを受取つて、犬の頭を撫でてやつた。鷹犬は先程の悟を忘れて、今度は甚だ得意であつた。信長は少しも休まず鷹を使つた。鷹が疲れると、鷹を換へて

鷹矛 鷹をすゑておく木

は使つた。その間に二度ばかり、山口太郎兵衛が顔を見せた。

「どうぢや、太郎兵衛、千の鴨は一羽の鶴に及ばんぞ。」

と、信長は太郎兵衛を叱つた。

「恐入りました。今に追ひ出して御覽に入れまする。」

と、太郎兵衛は當(あて)がはるやうな返事をした。

「きつと致せ。」

と、信長は念を押した。

「きつと致します。」

と、太郎兵衛は馬首を轉じて駈け出した。

午頃から空が晴れて、日光が暖くさし初めた。暫く注進の絶間があつた。信長はお鷹を鷹矛の上に休ませ、自分も床几に腰をおろして息を入れた。その時、はるか向ふの小牧山の方

に、けたゝましい鳥叫びの聲が起つた。すると、信長は鶴が來たことを知つて、再び鷹を拳の上に据ゑて立ちあがつた。鳥見の衆が飛んで來て、

「鶴で御座ります。」

と注進した。

勢子の追ひ立てる鳥叫びの聲が次第に近づいて、一羽の大きな鶴がまつさをな空に姿を現した。信長はお鷹が拳を蹴つてあがらうとするのを制しつゝ、いよ〳〵鶴が頭の眞上に來た時に、「行けっ。」と一喝して、お鷹を空に放つた。

お鷹は信長の顏に一陣の羽風を殘して、殆ど眞直に飛びあがつた。それと見た鶴は兩の翼を延ばして、大空を搏つた。同時に、翼に交叉する首と脚が竿立ちになつて、鶴のからだは見

る見る大空へ昇つて行つた。信長はじめ鷹匠も勢子も、皆笠に手をかけて空を仰ぎ見た。

瞬きの一つ毎に、鶴もお鷹も小さく見えた。追ひまはるお鷹は勿論のこと、命がけで飛びあがる鶴はもはや屏風繪の鶴ではなかつた。彼は強く大空を搏ちながら、くわっ〳〵と恐ろしい鳴聲を立てゝ敵をおどした。しかし、お鷹は鶴の鳴聲を恐れてはゐなかつた。彼は砲丸のやうに鶴に追ひすがつて、遂に鶴の鼻の先にその姿を現した。

すると、鶴は急にその首を下げ、水にくゞる水鳥のやうに足を逆しまに立てゝ、お鷹の腹を掠めながら、お鷹をやりすごした。昇る力があり餘つて、鶴に肩すかしを食はされたお鷹はもんどり打つて、腹を立てた。そして、次の瞬間には蹴鞠のやうに

肩すかし
相手が押返さうとする時、相手の頸にわが手をかけて捻り倒すこと、角力の手の一、こゝではそれに譬へていつたのである

斜に飛んで、再び鶴の鼻先に立ち塞がつた。

鶴は突然攻勢に轉じ、嘴でお鷹の眼を突きかゝつた。お鷹は身をかはしざま、鐵板のやうな翼で鶴の眼を叩きつけた。鶴は、くわっ〳〵と鳴きつゝ、なほも攻勢を取つた。お鷹は鶴の飛ぶまはりを飛びながら、隙を見ては鼻先に現れた。鶴の羽根がきらり〳〵と日に光つた。低く戰ふ時は、雙方の羽音が凄じく聞えた。

皆固唾を飲んで見物した。信長も知らず〳〵拳をにぎり肩に力を籠めてゐた。いつもながら、この時の興味が身上であつた。

鶴の疲れるのと反對に、お鷹はます〳〵猛つて來た。お鷹の翼はもう五六度も鶴の眼を叩き、その嘴は既に一二度鶴の頭

を突いた。鶴は天井からつるした折鶴のやうに、ふはり〳〵と漂ひ飛びながら、やつと身を支へてゐた。

この時、刈田の隅にゐた向待の一人が畦にしやがんで、懷から妙なものを取出し、手早くそれを着た。見ると、まつさをな陣羽織である。それが濟むと、熊笹の中に隱して置いた大小を取出して差した。誰も氣づくものはなかつた。

お鷹は鶴のまはりを一まはりして、背中を一つ突いた。鶴はもがきつゝ、幾度かその首を空に向けようとしたが、もはやその力がなく、さしもの翼も兩端が垂れさがつて來た。桐の一葉が水に沈むやうに、鶴は次第に身を沈めた。お鷹は一度高く舞ひあがつたと思ふと、また輪を作りながらおりて來て、鶴の右の眼にその嘴をかっきと打込んだ。鶴は急轉直下して、

藤吉郎の手柄（伊藤彦造筆）

刈田の上に落ちた。

青い陣羽織がころがるやうに馳せ寄つて、鶴をおさへつけた。

しかし、鶴は兩脚で土を蹴つたり長い翼で空を搏つたりして、陣羽織にその嘴を向けた。頬冠をした陣羽織の小男は鶴の嘴を横手で拂ひ、飛込んで首の付根を握りながら胴を抱へた。

それでも鶴は最後の力を揮つて身を悶えた。鶴が足を蹈ん張つて身を起さうとする度に、青い陣羽織の足も地を離れた。すると陣羽織は胴をばたつかせて、必死と鶴の首にしがみついた。

鶴と陣羽織とは互に力を角して、桔槔のやうな藝當を演じた。この頬冠をした陣羽織が何處から出現したかといふことを考へる隙もなく、一同はたゞ呆れてこの取組を眺めた。

勢子の輪も次第に縮んで來た。それと共に、鳥見の衆も知らず知らず持場を離れて、鶴の眞下に集つて來た。お鷹が鶴を追ひ落して信長の拳に歸つたので、一同喝采しかけると、そこへ青い陣羽織が飛び出して鶴と引組んだのである。鳥が落ちれば向待の衆が鍬を捨てゝ飛び出す習であるから、そのことに不思議はないけれども、頬冠をして青い陣羽織――おまけに大小二本を差して大童に働く小男が何者だか誰にも分らないので、一同は不思議でならなかつた。

不思議ではあるが取組は面白かつた。面白くはあるが何やら氣がかりであつた。果して信長の眼が光り出した。信長は鶴には目をつけず、一心に青い陣羽織に目をつけた。當日の勢子頭岩卷一若は鶴にも陣羽織にも目をつけず、一心に信

長の眼に目をつけた。そして、細かい胴ぶるひをしはじめた。

「どうも、これは前代未聞の、これは、はや」

と、口の中でいつたつもりではあるが、何をいつてゐるのか自分にも分らなかつた。

天文二十三年大つごもりの夕闇に、ぱつとした淺黄色の陣羽織を藤吉郎に見せられたのを思ひ出すと、何しろこれは大心配である。

「あゝなさけないことになつた。いやにすごい色に染上げて來たと思つたら、いよ〳〵これでわしの首も召上げられる。命取りの陣羽織にならうと思うて遣つたのではないが——」

と、岩卷は打ちしをれた。

天文二十三年
(一五五四)

鶴は全く疲れ果てゝ、土を蹴る力も首を擧げる力も失せてしまつた。白く美しい兩の翼を地に敷いて、首を枯草の上に伏せた。陣羽織は無雜作に鶴の首をつかんで肩にかけ、材木のやうに引摺り出した。鶴の脚は長々と刈田の土を搔いて、二筋の跡を殘した。

「これは、はや」

岩卷は泣きたくなつた。犬千代は無二の親友が鶴を擔いで頰冠のまゝ信長に見參しようとするのを見て、嬉しくなつてしまつた。青い陣羽織は素知らぬ顔をしてずん〳〵信長の前に進み寄らうとした。それと見て、小姓の十阿彌が躍り出て、彼の前に立ち塞がつた。

「さがれ〳〵、御前なるぞ。

と、黄色な聲を張りあげた。殆どそれと同時に、信長の聲で、

「かぶりものを取れ。何者だ。」

と大喝した。陣羽織は鶴の首を後へ撥ねあげて一二尺飛びしさり、兩手を土についてて、

「は、はっ。」

と、恭しく畏つた。そして、下を向いたまゝ手早く頰冠をはづし、今度は面をあげて信長の顏を徐ろに仰ぎ見た。

信長は扇子を膝に突き、半身を乘出して、上から

信長の御前に

きつと陣羽織を見おろした。そして、自分を見つめる彼の眼の中に憧憬と忠實と決死との色を見た。

「曾て見知らぬ奴。名を名乘れ。」

と叫んだ。

「しぇ――」。

と、岩卷は遠方で首を縮めた。

その時はもう陣羽織は畏つてゐなかつた。ちやんと首を立て直し、心持顎をしやくり出して、

出た藤吉郎

「私は御當家の足輕彌右衞門の忘形見、幼名小猿、元服して木下藤吉郎高昌と申し、本年二十歲に相成りまする」。

「して、誰の指圖で向待を致しをるぞ」。

と、信長の聲は前よりも鋭かつた。

「誰の指圖も受けませぬ。私こと只今岩卷一若の手につき、小者を勤めをりますれども、あはれ願はくはお厩の衆なりお草履番なりにお取立に預りたく、向待の衆にまぎれ込んでゐたので御座ります」。

と、恐れる氣色もなく述べた。

信長はそれには答へず、急に親しみを帶びた調子に變つて、

「そちはなか〳〵いたづらものであるぞ」。

といつて、藤吉郎の顏と鶴のむくろとを見くらべた。藤吉郎

はすかさず、

「仰の通りで御座ります。狩場のいたづらは申すまでもなく、鐵砲のいたづら、槍のいたづら、兵書のいたづら、諸軍かけひきのいたづら、一つとして手に入らぬものゝないいたづらもので御座ります」。

と、頻りに顎を突き出して吹聽した。信長は考へるやうな顏をして聞いてゐたが、

「廣言を吐くでない。推參至極の奴なれど、初鷹の吉日に免じ、今日は許す。さがれっ」。

と叱りつけた。今の今親しげに見えた信長とは別人のやうに、きびしい調子であつた。藤吉郎は、

「はゝあ、改めて御沙汰を待ちまする」。

と、恭しく土に額を擦りつけた。

改めて御沙汰？　奇態なことを申す奴とは思つたが、信長はそのまゝ馬に乘り、歸城を觸れ出した。

岩卷は藤吉郎が手討にもならず、のんのこしゃあとして歸つて來たのを見ると、うれし涙が胸にこみあげた。列の途中は何も口に出していはなかつたけれども、

「藤吉郎に萬一のことがあつたら、わしはなんとしてあの世で彌右衞門に詫をしよう。これまでに背丈も伸びて、一人前になつたものを——」。

さういつて、藤吉郎の後姿を見た。藤吉郎は青い陣羽織をそのまゝ着流し、兩手を振つて大胯に歩いて行つた。（太閤記）

一六　春の歌

尾上柴舟
名は八郎、岡山縣の人、文學博士、歌人、明治九年生

この文章の面白みは、何といつても藤吉郎が手柄を立てたところにある。それは鷹狩といふ晴れの場所に於て、彼があゝまでに大膽に振舞つたといふ事實から來てもゐるが、しかし、何の苦もないやうに、事がらを思のまゝに運んで行つたその書きぶりによることも多い。たゞの鷹狩の勇ましさに加へて、大きな芝居がそこに仕組まれてゐるかのやうに、話に變化のあるのが珍しい。筆の運びがいかにも器用で達者で、しかも新しみのある文章である。

若山牧水

峰かけてきほひ茂れる杉山のふもとの原の山ざくらばな。

尾上柴舟

春の日に向ひて立てば喜びが光となりて降りそゝぐかな。

窪田空穗
名は通治、長野縣の人、歌人、明治十年生

土岐善麿
東京の人、歌人、明治十八年生

落合直文
宮城縣の人、國文學者、明治三十六年歿、年四十三

正岡子規
名は常規、愛媛縣の人、俳人、明治三十五年歿、年三十六

伊藤左千夫
名は幸次郎、千葉縣の人、歌人、大正二年歿、年五十

春日影かげろふ空に一つひばり、羽振り上り紛れんとする。　窪田空穗

朝風の吹上ぐる空や雲遠く、のぼりにのぼるわが紙鳶一つ。　土岐善麿

水草の細葉の青さ川ぞこに、かつ光りつゝたゞよふが見ゆ。　前田夕暮

歌のまき二卷三卷座に散りて、あるじは見えず山吹のはな。　落合直文

瓶にさす藤の花ぶさ花垂れて、やまひの床に春暮れんとす。　正岡子規

古寺の庫裡暮ちかく庭を寒み[が]ぐろき土に梅のはな咲く。　伊藤左千夫

太田正雄
號は木下杢太郎、靜岡縣の人、醫學博士文學者、明治十八年生

二七　崑崙山

太田正雄

鴻一君は今年中學の四年生です。英語が得意で、級中第一です。それぱかりでなく、支那語も大變上手なのです。最初は支那語が上手なことは誰も知りませんでしたが、支那人の子供が一年に入學した後、鴻一君がその生徒と支那語で話をしてゐたのが分つて、評判になつたのです。

鴻一君は二年生の時旅順の方から今の中學に轉校して來たのです。それはその歳に滿洲にゐたお父さんが亡くなつて、東京の親類に引取られたからです。

鴻一君は七歳の時お母さんの手を離れて、滿洲のお父さんの處へ往きました。そして、十五歳までそこにゐたのです。「君、なぜお母さんの處へ往かないのだ。」事情が段々分つて來た

後に、友達がさう尋ねても鴻一君は返事をしません。

鴻一君はよく子供の時滿洲で經驗したといふ話をしました。しかし、友達はみんな、「そんなことがあらう筈はない。」といひます。鴻一君は、「いや、確にほんたうのことだ。」といひます。

鴻一君がはじめて滿洲へ往つた歳のことです。

或日お父さんが、

「坊や、あそこを見て御覽なさい。」

と、鴻一君にいひました。それは鴻一君が急に日本に歸りたくなつて、散々に泣いた後でした。お父さんはやつと鴻一君をなだめて、二階の上に塔のやうに立つてゐる小さい三階の物見へ連れて往つて、そして、遠い野原の方を指さして尋ねたのです。

その時、鴻一君は頭からすつぽりと顏まで這入る毛の帽子を被つてゐました。

「坊や、御覽。あそこを人が大勢通つてゐるだらう。そら、お馬が澤山ゐるだらう。お馬の前にね、お馬より小さい獸がゐるだらう。あれは何だか知つてゐるかい。」

鴻一君は返事をしません。

「あれはね、坊や、驢馬といふものだよ。驢馬、日本にはゐないねえ。」

そんな動物は確に日本にはゐないと思ひましたが、泣いて怒つた後ですから、鴻一君はまだわざと默つてゐて、返事をしません。

三階の下には、支那人の家の黑い屋根がずらりと竝んでゐま

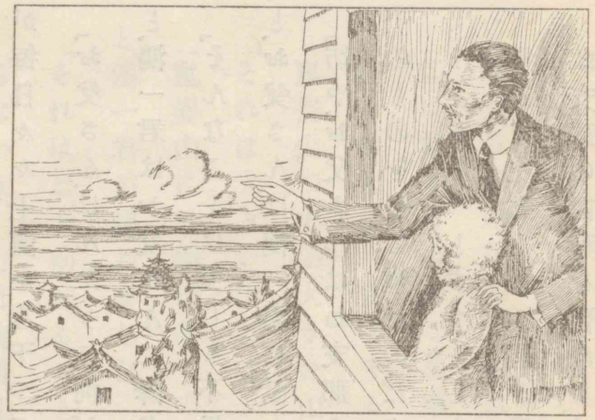
した。その向ふは一面に眞白な平地でした。その上を百人とも二百人とも數へきれぬほどの人が黑い塊になつて、ぞろぞろと歩いてゐました。人間と同じぐらゐの數の馬だの驢馬だのも歩いてゐました。

「ねえ、坊や、お前はあの眞白に雪の降つてゐるところは何だとお思ひだ。山？　野原？　それとも河？」

鴻一君がまだ返事をしませんから、お父さんが自分で返事をしてしまひました。

「坊や、あれはほんたうは大きな河なのだよ。今に四月になると雪が解けて、あそこの處が河になるのだよ。」

さう聞かされて、鴻一君はびつくりしました。馬だの人だの車だの、あんなに澤山動いてゐる下が大きな河だとは考へら



お父さんと鴻一君

れません。

「坊や、夏になつたら、あの河でお父さんと一緒に水を浴びようね。」

鴻一君はその日は別段何もいひませんでしたが、翌日お父さんと仲直りをした時に、さう話しました。

「お父さん、僕はきつと河でないと思ふよ。」

三月が來ました。雪が解けはじめました。四月が來ました。河の水が流れて來ました。五月になると、柳の葉が急に青く

なりました。六月になると燕が來て、廣い河水の上に腹を擦りつけるやうに飛びまはりました。材木を一ぱい積んだ船が毎日々々上流から下つて來ます。

「お父さん、ほんたうに河だつたねえ」。

と、鴻一君はお父さんに降參しました。

「そんなことは少しも不思議ではないのだよ」。

と、お父さんは鴻一君に話して聞かせました。

「坊や、お父さんはね、支那のもつと〳〵奥へ往つて、いろ〳〵のものを見て來たのだよ。お前も大きくなつたら、お父さんよりもつとずつとえらい人にならなければいけないよ。そして、支那といふ國を助けてやるのだ。それだから、お前は支那の言葉を習はなければいけない」。

「お父さん、支那の奥つてどんな處ですか」。

「お父さんの往つた處は崑崙山といふ山なのだ。そら、あそこに見えるあんな馬車ね、あの馬車に乘つて毎日百里づつ往くのだよ。さうすると、百日目にその山に着くのだ」。

「崑崙山つて山、大きい山？」

「それは大きい山だよ。富士山の百倍もある山なのだ」。

「崑崙山には何がゐるの」。

と、鴻一君が尋ねました。

「それはね、お前がもつと大きくなつて學問しなければわからないよ。その崑崙山に登るとね、望遠鏡を使はなくても、世界中が見えるのだよ。日本でも印度(India)でも、希臘(Graecia)でも伊太利(Italy)でも、獨逸(Deutsch)でも佛蘭西(France)でも、一目に見えるのだ」。

「そんなら誰でもみんな往つて見ればいゝね」
「けれども道が遠いから、誰にでも往かれるといふのではないのだよ。それに、その山へ往つたからつて、學問のない人にはそんなところが見えないのだ。學問があればあるだけ、はつきりとよく見えるのだよ。だから、坊やも勉強して學者になるのだね」
「日本も見えるの、東京も？」
「東京の二重橋も見えるのだよ」
「坊やのお家の方も見えるかしら」
それにはお父さんは返事をしませんでした。
鴻一君の頭はもう空想で一ぱいになつて、どうかしてその崑崙山へ往つて見たくてたまらなくなりました。

「僕、早くそこへ往きたいな」
「大きくならなくては往けないのだよ。大きくなつたら、支那語だの英語だの希臘語だのを習ふのだねえ。崑崙山からは、獨逸と佛蘭西と戰爭してゐるところなんかはつきりと見えたんだよ。坊や、知つてゐるだらう、西洋に戰爭のあつたことを。そんな戰爭がはつきりと見えたのだ。そして、またそこでは今の戰爭ばかりでなく、千年も二千年も前にあつた戰爭までも見えるのだよ」
「千年も二千年も前にも戰爭があつたの？」
「あつたとも。亞歷山大王（アレキサンドル Alexander）といふ王様が天竺を攻めに來たことがあるのだよ」
「ねえ、お父さん、どうかして、坊やが大きくならなくてもそこ

亞歷山大王　西暦紀元前四世紀の人、マセドニア王フイリップ二世の子、印度を攻めたことがあつた

へ往くことは出來ないの」

お父さんは笑ひました。そして、

「それは魔法でも使つたら往けるかも知れない」

といひました。

「魔法つて何」

と、鴻一君が尋ねました。

「それは張が知つてゐるだらう」

と、お父さんがいひました。張といふのは家に使つてゐる支那人のことです。

「張、魔法つて何」

鴻一君が或日張に尋ねました。張は何のことだかさつぱり分らないので、眼を白黑させました。

「僕、崑崙山へ往きたいんだが、魔法を教へてくれない？」

さういつて、鴻一君は張に詳しい話をして聞かせました。張にもはじめてわけが分つて來ました。

「坊つちやん。お父さんの部屋に支那の地圖があるでせう。あれをお父さんに知れないやうに、そつと持つておいでなさい。そして、明日の夕方、誰にも知れないやうに家を出ておいでなさい。すると、道で支那人の道士といふ人に會ひますから、その人に道をお聞きなさい」

さういつて、張は詳しく魔法のことを教へてくれました。

すぐ鴻一君はお父さんの書齋に這入つて、お父さんの大事の地圖を持出しました。そして、張に教はつた通りに、街道の方へ駈け出して往きました。

館　楊

最初のうちは長い河の堤に沿うて歩きました。そこには省長の館がありました。また暫く往くと、道を跨いで大きな城門が立つてゐました。それから段々歩いて往くと、もう人家が盡きて、たゞ廣い平地になりました。黄色い土と小さい高まつた小山の方には何も見えず、見えるものはたゞぽつねんと立つてゐる楊の樹ばかりでした。ちやうど日が沈む時で、遠い地平線には、朱のやうに眞赤な、日の丸の旗よりも大きな太陽が沈むところでした。

太陽が沈んでしまふと、風が寒くなつてあたりは寂しくなり、まるで大海のたゞ中へ出たやうでした。鴻一君は何故とも知らず悲しくなつて、たうとう泣いてしまひました。そして、「お母さん、お母さん」と呼びながら、あてもなくずん〳〵駈けて

履

往きました。

そこへ黑い頭巾を被つて赤い履をはいて、白い鬚を長く垂らした支那人が出て來ました。鴻一君はやつと安心して、

「私は崑崙山に往きたいが、どつちへ往つたらよいでせうか。」

と尋ねました。すると、白い鬚の生えたその老人は笑ひ出して、

支那人と鴻一君

「わたしも若い時分は、崑崙山へ往きたい〳〵と思つて旅行をしたものだが、君みたいにそんな子供ではなかつた。あの山へ往くには、君はまだ少し小さすぎる」。

なほも鴻一君が賴みますと、その老人はかういひました。

「それではわたしがよく教へてあげるから、その通りになさい。君はこの道を何處までも眞直に歩いて往くのだ。そして、疲れてひとりでに足が止まり、ひとりでに寢入つてしまふまでは立ち止まつてはいけないよ。そして、君が眠つてしまふと、青い着物を着た人が君を案内してくれる」。

さういつて、老人は別れて往きました。

いつか夜は深くなつて、歩くべき道もよく分りません。鴻一君は老人に教へられた通りに歩いてゐましたが、突然どかん

と深い溝に落ちて、そのまゝ氣がとほくなつてしまひました。

びつくりして目をさました時には、自分の傍に青い着物を着た一人の人が立つてゐました。

不思議な太陽が輝いて、世界がきら〳〵してゐます。よく見ると、自分と青い着物を着た人だけが普通の人間で、他はまるで鉛の人形のやうに小さい人間ばかりです。また人間の家らしいものも、マッチの箱かインキ壜ぐらゐのものです。

「僕は一體何處へ來たのです」。

と、鴻一君が尋ねました。

「あなたは崑崙山へ往きたいといふ願でしたが、こちらの國の規則で、小さい子供はどんなことがあつても崑崙山へは往けないことになつてゐます。しかし、歴史の神樣からの

口添へですから、崑崙山の麓の小人國へ連れて來てあげたのです。」

「歴史の神様つて何ですか。」

「あなたは昨夕野原の眞中で會つたでせう。白い鬚の生えてゐる仙人です。」

「あゝ、あの人がさうでしたか。」

「さあ、それではこれから御案内しませう。何處でも好きな處をあなたは見つめて御覽なさい。ほんたうの世界で過去から現在に至るまで行はれてゐる活動は、あり〳〵とそのまゝ見えるのですから。」

鴻一君が注意して見ますと、その鉛の人形のやうな人々は一刻も休んでゐないで活動してゐます。一軍團ばかりの兵隊

軍團 師團をいくつか合せたもの

が戰爭をしてゐるところも見えます。總大將らしい人が討死してゐる樣子も見えます。また目を轉じて見ると、總大將の國の都會では、總大將の討死の知らせを聞いて、王樣ががつかりしてゐます。暫くすると、大勢の敵軍がその都へ攻め寄せました。そんな人々はみんな話したり騒いだりしてゐますが、何をいつてゐるのかさつぱり分りません。

そこの王樣にはかはいらしい王子と王女とありました。所が、獰猛な顏をした敵軍の兵隊が二人を取圍んで、今や二人を縛らうとしてゐます。鴻一君は同情に堪へなくなつて、手を延ばして小さい兵隊をつまみ上げて、王子・王女を救はうと思つたのです。すると、鴻一君を案内してくれた青い着物を着た人があわたゞしく鴻一君の手を引張りました。

獰猛な いやにたけだけしい

あなたは決して世間の人々の運命の邪魔をしてはいけません。あなたにはたゞ見てゐるだけのことしか許されてゐないのですから。」

「でも、あんまりかはいさうぢやあありませんか。」

「も少し長く見ておいでなさい。かはいさうなことの起るのはその遠いいはれがあるのですから。あなたが長く見てゐると、かはいさうだと思つたことがかはいさうでなくなつたり、また善いと思つたことが悪いことだつたりしますから。」

また或處を眺めてゐますと、一人の百姓が段々出世して、たうとう軍の總大將になりました。すべて實際の世界で一年で行はれるものが、こゝでは數分の間に行はれるので、變化が實

に早いのです。

「それで、私は今何處にゐるのでせう。」

と、鴻一君が尋ねました。

「あそこです。」

と、青い着物の人が指さし示しました。

見ると、廣い野原の溝のなかで、小さい子供が寢入つてゐます。鴻一君はびつくりしました。その子供以外の世界は一刻も休まずに活動してゐるのに拘らず、それ一人が前後も知らず寢入つてゐるのですから。

「どうかしてやつて下さい、あの子供を。」

と、たまらなくなつて鴻一君がいひました。

「それはあなた御自身です。自分の運命だけは自分で動か

すことが出來るのですから、あなたのお考次第で、その子供をどうにでもしなさい」。

と、青い着物の人がいひました。

「さて、それならどうしたらよいだらう」。

と、鴻一君は考へました。そして、少年の寢てゐるまはりを見廻しました。支那人の澤山住んでゐる大都會がありました。またやゝ遠くの處に東京も見えました。自分の友達であつた子供が大學生になつて、電車に乘つて歸つて往きます。それから、もと自分の住んでゐた家を搜しましたが、そこにはもう他人が住んでゐて、會ひたいと思つてゐたお母さんの姿は見えません。それならお父さんはどうしていらつしやるだらうと考へて、少年の寢てゐる野原の近くの或小都會を搜し

て見ました。

お父さんの頭にはもう白髮が生えてゐました。そして、鴻一君の平生見なれた西洋館の窓から首を出して、「あゝ、鴻一は何處へ往つたらう、鴻一は何處へ往つたらう」と歎いてゐました。その樣子を見ると、鴻一君は氣の毒でたまらないやうになりました。それで、荒野に眠つてゐる少年を搖り起して、いきなりそれを指の先でつまみ上げ、お父さんの家の中へ入れてやりました。

その瞬間に、鴻一君のまはりの世界はまたすつかり一變してしまひました。

鴻一君は自分の家で寢床の中に寢てゐます。その傍にお父さんが悲しさうに立つてゐます。

「鴻一、やつとお前は目がさめたかい。」

といつて、お父さんは喜びました。後で聞くと、鴻一君は野原の中に一晩寢てゐて、次の日家に運ばれて來ても、一日中眠り通したのださうです。

鴻一君は自分の見て來たことを一々詳しくお父さんに話しました。

「外の處に往かないで、よくわたしの處に戻つて來てくれた。」

といつて、お父さんは喜びました。

「その時、お前が若しその子供を外の處へ動かしたら、お前は今この家にかう戻つてはゐなからう。お前は非常に勢力のある政治家にもなれたらうし、また零落した乞食となることも出來たらう。その時のお前の考次第で、お前の運命

零落

はどうにでもなつたのだ。それにしても、よくお父さんの處に歸つて來てくれた、よく歸つて來てくれた。」

さういつて、お父さんはうれしさうに鴻一君の頭を撫でました。（厥後集）

普通にはありさうもないことだが、夢としてそれを見ればまた格別の面白さがある。この文章はよくその點をあらはしてゐる。父と子との對話、少年と支那人との問答、そんなのがいかにも自然で、說話の筋がよくとほつてゐる。

現代文學新選 卷一 終

□現代文學新選□

定價金六拾七錢

昭和三年九月二十四日印刷・昭和三年九月二十七日發行
昭和四年一月十二日訂正再版印刷・昭和四年一月十五日訂正再版

著作者 八波則吉

發行者 東京市小石川區小日向水道町八十四番地
株式會社 東京開成館
代表者 松本繁吉

印刷者 東京市小石川區西江戸川町二十一番地
佐々木俊一

發行所 東京市小石川區小日向水道町八十四番地
株式會社 東京開成館
【振替貯金口座】東京五三二二番

東京—富士印刷株式會社—印刷

□現代文學新選 第一卷□

定價

五、四〇
（郵稅八錢）

五、二〇
（郵稅六錢）

一、二〇
（郵稅四錢）

一、〇〇
（郵稅二錢）

發行所　東京開成館
（東京市神田區錦町一丁目十番地　電話神田一〇〇八番　振替口座東京一二三三番）

印刷者　山本久吉
（東京市小石川區西江戸川町二十一番地）

發行者　東京開成館
（東京市小石川區西江戸川町二十一番地）

外務者　佐藤喜吉

著作者　八波鳴吉

昭和四年一月十二日印刷納本
昭和四年一月十五日發行
昭和三年六月二十四日申請
昭和三年六月二十七日發行

昭和一〇年度文部省推薦中小學一覽

一五影山文

広島大学図書
2000040092